

NOKUBIDAIICHI

# 野首第1遺跡

県道木城高鍋線高速関連道路・河川等緊急整備事業（青木工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

宮崎県埋蔵文化財センター

## 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第86集

『野首第1遺跡 県道木城高鍋線高速関連道路・河川等緊急整備事業(青木工区)に伴う埋蔵文化財発  
掘調査報告書』 正誤表

| ページ・図番号    | 誤                               | 正                         |
|------------|---------------------------------|---------------------------|
| P33—L23    | (第23図)                          | (第22図)                    |
| P96—L33    | (第41~42図)                       | (第40~41図)                 |
| P63—L29~35 | (第43~45図)                       | (第42~44図)                 |
| P98 第30表   | 表中のNo 「597 543 544 545 546 547」 | 「543 544 545 546 547 548」 |
| P122—L13   | 趾                               | 踵                         |
| P125 第38表  | 表中のNo 「」                        | 「636 637 638 639」         |
| P134—L17   | (第135図・図版7)                     | (第109図・図版7)               |
| P144 第46表  | 731 SC1 ...                     | 733 SC1 ...               |
| P151—L9    | 窓／板櫻                            | 窓ノ板櫻                      |

NOKUBI DAI ICHI

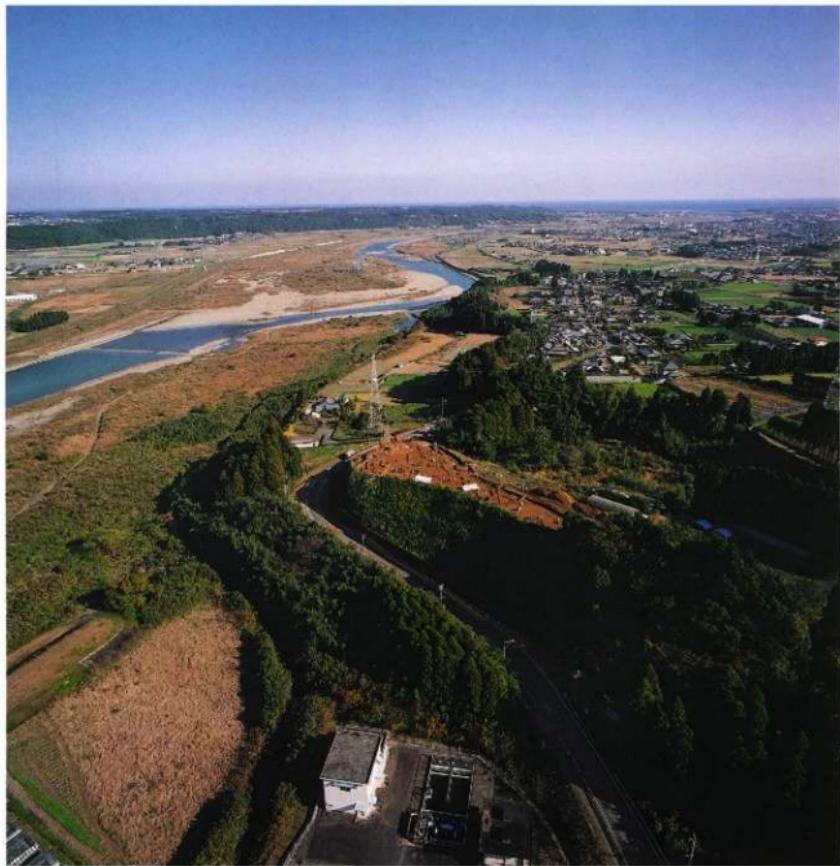
# 野首第1遺跡

県道木城高鍋線高速関連道路・河川等緊急整備事業（青木工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2004

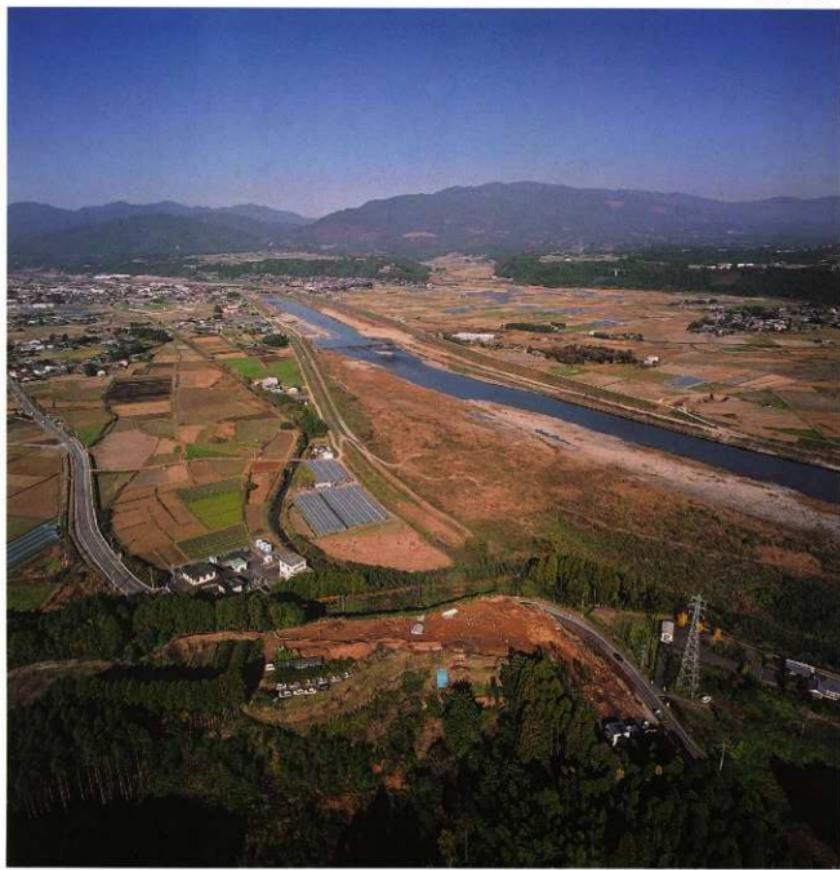
宮崎県埋蔵文化財センター



### 遺跡上空より日向灘をのぞむ（西より）

遺跡は小丸川（写真左）にむかって突き出た舌状丘陵上に位置する。

写真右奥には高鍋市街がひろがり、小丸川をはさんで正面奥は持田古墳群の台地である。小丸川の先には、遠く日向灘をのぞむ。

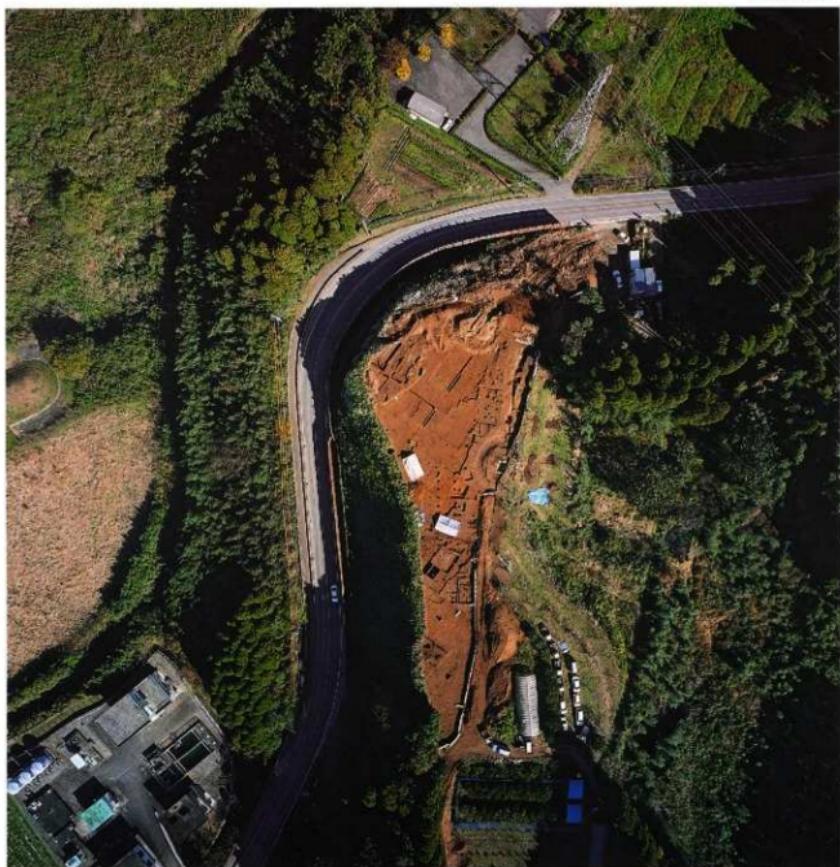


### 遺跡上空より高城をのぞむ（西より）

写真手前の丘陵が遺跡にあたり、中央を小丸川が流れ、写真奥には九州山地の山並みが遠望できる。

写真中央にひろがる水田地帯は、戦国時代、高城の戦い（1587年）の地である。写真奥の丘陵部に島津軍が高城を構え大友軍を破った。

遺跡は、合戦の地を広くのぞむ位置にある。



### 野首第1遺跡全景（真上より）

調査は、「く」の字に曲がった県道をよりゆるいカーブに改良する工事にともなって実施された。

調査対象地は、丘陵平坦面と斜面部である。写真下には丘陵が連続し、車列から右手には鉄塔側からのみた谷が入っている。近い将来、この谷部を東九州自動車道が縦走するため、周囲の景観は大きくかわることだろう。



### 縄文早期の散礫1のひろがり（東より）

散礫1は、調査地のうち、丘陵平坦面の西側（A1区）にひろがる。

礫の分布には疎密があり一様でない。

写真奥には、古墳時代中期の竪穴住居が数軒みえ、右手は急崖となり県道が走っている。



### 縄文早期の散礎2のひろがり（東南より）

散礎2は、調査地のうち、丘陵平坦面から斜面に変わるあたり（A 2区）にひろがる。

散礎2は丘陵端までひろがっており、端にいくほどより厚く堆積するのがわかる。

なお、写真最右の切株のあたりに、「百濟王伝説」に彩られた五輪塔・板碑群が立っていた。



### 谷に開口する野首1号墳（西より）

写真中央の石組が玄室にあたり、その外周を周溝がめぐっている。

古墳は大きく削平を受けており、玄室天井間や埴丘もまったく失われている。玄室は写真右の民有地に統いており、その先の谷に向かって開口するのであろう。周溝奥には、1号墳と近接した時期の竪穴住居が位置する。

なお、写真手前から左の礫や土坑は縄文時代早期のものである。



#### 近世末から近代の土坑群と丘陵への道（南より）

丘陵下から登ってくる道（写真中央）と登ってすぐの平坦面に掘り込まれた土坑群（写真左に並ぶ方形の土坑）。

写真手前側の谷間には小さな集落があり、土坑群はこれにともなう廃棄穴であろう。

近代の峠（丘陵）を越える旧道は戦後の道路付け替えで機能を失くし、今再び県道改良工事によって丘陵そのものが大きく削り取られることとなった。

土層断面  
(I ~ VI層)



土層断面  
(VII ~ X層)



道路工事中のカット面  
(河成段丘)



## 序

宮崎県教育委員会では、県道木城高鍋線高速関連道路・河川等緊急整備事業（青木工区）に伴い、野首第1遺跡の発掘調査を行いました。

野首第1遺跡の周辺には下耳切第3遺跡・牛牧古墳群・高鍋城址をはじめとする旧石器時代から近世にかけての多くの遺跡や文化財が所在しており、人々の営みが当地域で長い間続いていることが知られています。

今回の調査では、縄文時代の集石遺構・土坑、古墳時代の横穴式石室などの遺構が検出されるとともに始良Tn火山灰層下の石器、古墳の副葬品である鐵鏃・馬具などの多数の遺物が出土し、当地の歴史を考えるうえで貴重な資料となりました。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、埋蔵文化財の保護活用に対する理解の一助となれば幸いです。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、ならびに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成16年3月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所長 米 良 弘 康

## 例　　言

- 1 本報告書は、県道木城高鍋線高速関連道路・河川等緊急整備事業（青木工区）に伴い、宮崎県教育委員会が実施した野首第1遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は平成12年6月30日から平成12年12月15日まで実施した。
- 4 現地での実測・写真撮影等の記録は田中・藤木・秋成が発掘作業員の協力を得て作成した。
- 5 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・実測・トレース等は田中・藤木が整理作業員の協力を得て担当した。
- 6 本書で使用した遺物写真は田中・藤木が撮影した。
- 7 次の業務はそれぞれ業者に委託した。

|                               |
|-------------------------------|
| 空中写真撮影………有限会社スカイサーベイ          |
| 水準点測量・グリッド杭設置等………有限会社タイユー測量設計 |
| 写真測量（航測）………株式会社朝日航洋           |
| 自然科学分析………株式会社古境環境研究所          |
| 金属製品応急処置………株式会社京都科学           |
- 8 本書で使用した遺跡位置図は国土地理院発行5万分の1図「妻」「高鍋」、周辺地形図は高鍋町作成5千分の1図を基に作成した。
- 9 土層断面及び土器の色調等は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』による。
- 10 本書で使用した方位は、磁北と座標北（座標第II系）である。座標北を用いた場合は、G.N.と表示している。レベルは海拔絶対高である。
- 11 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

|          |             |        |            |           |
|----------|-------------|--------|------------|-----------|
| S A…豎穴住居 | S B…掘立柱建物   | S C…土坑 | S E…溝状遺構   | S G…道路状遺構 |
| S H…ピット  | S I…疊群・集石遺構 | S N…古墳 | S Q…土器群（溜） |           |
- 12 本書の執筆と編集は飯田・田中・藤木が担当した。文責については本文目次に記した。
- 13 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

# 本文目次

## 第Ⅰ章 はじめに

- 第1節 調査に至る経緯 ..... (飯田) 1

- 第2節 調査の組織 ..... (田中) 1

## 第Ⅱ章 調査の概要

- 第1節 地理的環境 ..... (田中) 2

- 第2節 歴史的環境 ..... (田中) 3

## 第Ⅲ章 調査の方法と経過

- 第1節 調査の方法 ..... (藤木) 7

- 第2節 調査の経過 ..... (藤木) 8

- 第3節 調査日誌抄 ..... (田中) 11

## 第Ⅳ章 試掘・確認調査 ..... (藤木) 12

## 第Ⅴ章 層序 ..... (田中) 13

## 第VI章 調査の記録

### 第1節 旧石器時代の遺構と遺物

- 1 旧石器時代Ⅰ期 ..... (藤木) 15

- 2 旧石器時代Ⅱ期 ..... (藤木) 26

### 第2節 縄文時代の遺構と遺物

- 1 竪穴住居 ..... (藤木) 42

- 2 散 碓 ..... (田中) 43

- 3 集石遺構 ..... (田中) 45

- 4 土 坑 ..... (藤木) 55

- 5 縄文土器 ..... (田中) 64

- 6 縄文石器 ..... (田中) 80

- 第3節 弥生時代の遺構と遺物 ..... (藤木) 98

### 第4節 古墳時代～古代の遺構と遺物

- 1 集 落 ..... (藤木) 100

- 2 野首1号墳 ..... (藤木) 118

- 3 土 坑 ..... (藤木) 129

### 第5節 中世の遺構と遺物

- 1 中世Ⅰ期の遺構と遺物 ..... (藤木) 134

- 2 中世Ⅱ期の遺構と遺物 ..... (藤木) 137

- 3 板碑と五輪塔 ..... (藤木) 138

### 第6節 近世・近代の遺構と遺物

- 1 土 坑 ..... (藤木) 142

- 2 道 ..... (藤木) 145

- 第7節 その他の遺構 ..... (藤木) 150

## 第VII章 総 括 ..... (藤木) 152

## 挿 図 目 次

|         |   |     |
|---------|---|-----|
| 第 1 図   | 遺跡位置図 (S=1/50,000) .....                    | 5   |
| 第 2 図   | 周辺地形図 (S=1/5,000) .....                     | 6   |
| 第 3 図   | 明治時代の遺跡周辺地形図 (S=1/50,000) .....             | 7   |
| 第 4 図   | 遺構配置図 (S=1/500) .....                       | 9   |
| 第 5 図   | グリッド配置図 (S=1/500) .....                     | 10  |
| 第 6 図   | 層序図 .....                                   | 13  |
| 第 7 図   | 試掘・確認調査トレンド配置図 (S=1/1,000) ·<br>土層柱状図 ..... | 14  |
| 第 8 図   | 旧石器 I 期調査区位置図 .....                         | 15  |
| 第 9 図   | 旧石器 I 期遺物分布図 (1) ·<br>上層断面図・堆积実測図 .....     | 17  |
| 第10図    | 旧石器 I 期遺物分布図 (2) .....                      | 18  |
| 第11図    | 旧石器 I 期遺物実測図 (1) .....                      | 21  |
| 第12図    | 旧石器 I 期遺物実測図 (2) .....                      | 22  |
| 第13図    | 旧石器 I 期遺物実測図 (3) .....                      | 23  |
| 第14図    | 旧石器 I 期遺物実測図 (4) .....                      | 24  |
| 第15図    | 旧石器 I 期遺物実測図 (5) .....                      | 25  |
| 第16図    | 旧石器 II 期遺物分布図 .....                         | 26  |
| 第17図    | 旧石器 II 期堆积実測図 .....                         | 27  |
| 第18図    | 旧石器 II 期堆积分布図・土層断面図 .....                   | 28  |
| 第19図    | 旧石器 II 期堆积実測図 (1) .....                     | 29  |
| 第20図    | 旧石器 II 期堆积実測図 (2) .....                     | 30  |
| 第21図    | 旧石器 II 期堆积実測図 (3) .....                     | 31  |
| 第22図    | 旧石器 II 期敲石の長軸比 .....                        | 33  |
| 第23図    | 旧石器 II 期堆积実測図 (4) .....                     | 34  |
| 第24図    | 旧石器 II 期堆积実測図 (5) .....                     | 35  |
| 第25図    | 旧石器 II 期堆积実測図 (6) .....                     | 36  |
| 第26図    | 包含層・外層・下伏岩層実測図 .....                        | 37  |
| 第27図    | 鶴文時代遺物分布図 .....                             | 41  |
| 第28図    | S A101・102遺物 .....                          | 42  |
| 第29図    | S A101出土遺物実測図 .....                         | 43  |
| 第30図    | 散礫 1 挖出状況 .....                             | 44  |
| 第31図    | 散礫 2 挖出状況 .....                             | 45  |
| 第32図    | 集石遺構分類模式図 .....                             | 46  |
| 第33図    | 集石遺構A類実測図 .....                             | 46  |
| 第34図    | 集石遺構B類実測図 .....                             | 48  |
| 第35図    | 集石遺構C類実測図 (1) .....                         | 50  |
| 第36図    | 集石遺構C類実測図 (2) .....                         | 51  |
| 第37図    | 集石遺構C類実測図 (3) .....                         | 52  |
| 第38図    | 集石遺構C類実測図 (4) .....                         | 53  |
| 第39図    | 土坑A-1類実測図 .....                             | 57  |
| 第40図    | 上坑A-2類実測図 .....                             | 58  |
| 第 41 図  | 土坑A-2類はか土層断面図 .....                         | 59  |
| 第 42 図  | 上坑B・C類実測図 (1) .....                         | 61  |
| 第 43 図  | 土坑B・C類実測図 (2) .....                         | 62  |
| 第 44 図  | 土坑B・C類実測図 (3) .....                         | 63  |
| 第 45 図  | 縦文土器尖端図 (1) .....                           | 65  |
| 第 46 図  | 縦文土器実測図 (2) .....                           | 66  |
| 第 47 図  | 縦文土器実測図 (3) .....                           | 68  |
| 第 48 図  | 縦文土器実測図 (4) .....                           | 69  |
| 第 49 図  | 縦文土器実測図 (5) .....                           | 69  |
| 第 50 図  | 縦文土器尖端図 (6) .....                           | 72  |
| 第 51 図  | 縦文土器尖端図 (7) .....                           | 73  |
| 第 52 図  | 縦文土器実測図 (8) .....                           | 74  |
| 第 53 図  | 縦文土器実測図 (9) .....                           | 75  |
| 第 54 図  | 縦文土器実測図 (10) .....                          | 77  |
| 第 55 図  | 縦文土器実測図 (11) .....                          | 78  |
| 第 56 図  | 縦文土器実測図 (12) .....                          | 79  |
| 第 57 図  | チャート・製石器群実測図 .....                          | 81  |
| 第 58 図  | 黒曜石・安山岩ほか製石器群実測図 .....                      | 82  |
| 第 59 図  | 板島産黒曜石・安山岩群実測図 .....                        | 83  |
| 第 60 図  | 尾鉢山産酸性岩製石器群実測図 .....                        | 85  |
| 第 61 図  | ホルンフェルス・頁岩製石器群実測図 (1) .....                 | 86  |
| 第 62 図  | ホルンフェルス・頁岩製石器群実測図 (2) .....                 | 87  |
| 第 63 図  | ホルンフェルス・頁岩製石器群実測図 (1) .....                 | 88  |
| 第 64 図  | ホルンフェルス・頁岩製石器群実測図 (2) .....                 | 89  |
| 第 65 図  | ホルンフェルスはか製石斧類実測図 .....                      | 90  |
| 第 66 図  | 打斧石錐実測図 .....                               | 92  |
| 第 67 図  | 石錐頭および敲石実測図 .....                           | 93  |
| 第 68 図  | 磨石実測図 .....                                 | 94  |
| 第 69 図  | 磨石・研石実測図 .....                              | 95  |
| 第 70 図  | 土坑および出土遺物実測図 .....                          | 98  |
| 第 71 図  | 土器集中検出状況および出土遺物実測図 .....                    | 99  |
| 第 72 図  | B 区古墳時代堆积分布図 .....                          | 100 |
| 第 73 図  | A 区古墳時代堆积分布図 .....                          | 101 |
| 第 74 図  | SA 3 実測図 .....                              | 102 |
| 第 75 図  | SA 6 および出土遺物実測図 .....                       | 102 |
| 第 76 図  | SA 1 および出土遺物実測図 .....                       | 103 |
| 第 77 図  | SA 2 および出土遺物実測図 .....                       | 105 |
| 第 78 図  | SA 4 および出土遺物実測図 .....                       | 106 |
| 第 79 図  | SAS 遺物出土状況・SA5出土遺物実測図 (1) .....             | 107 |
| 第 80 図  | SAS5出土遺物実測図 (2) .....                       | 109 |
| 第 81 図  | SA10・SA11および<br>SA10土器埋設印・出土遺物実測図 .....     | 110 |
| 第 82 図  | SA13および土器埋設印・出土遺物実測図 .....                  | 111 |
| 第 83 図  | SC 7 および出土遺物実測図 .....                       | 112 |
| 第 84 図  | 土坑・溝等出土遺物実測図 (1) .....                      | 113 |
| 第 85 図  | SE 5 土層断面図 .....                            | 114 |
| 第 86 図  | 上坑・溝等出土遺物実測図 (2) .....                      | 114 |
| 第 87 図  | 調査区内採集遺物実測図 .....                           | 115 |
| 第 88 図  | 野首 1 号埴平面図 .....                            | 120 |
| 第 89 図  | 周溝土層断面図 .....                               | 120 |
| 第 90 図  | 周溝内川土堆積実測図 (1) .....                        | 120 |
| 第 91 図  | 周溝内出土遺物状況 .....                             | 121 |
| 第 92 図  | 周溝内出土堆積実測図 (2) .....                        | 121 |
| 第 93 図  | 野首 1 号埴立室実測図 .....                          | 123 |
| 第 94 図  | 野首 1 号埴立室内出土物出土状況 .....                     | 123 |
| 第 95 図  | 野首 1 号埴立室内出土土器 .....                        | 124 |
| 第 96 図  | 野首 1 号埴立室内出土装身具 .....                       | 125 |
| 第 97 図  | 野首 1 号埴立室内出土铁器 (1) .....                    | 126 |
| 第 98 図  | 野首 1 号埴立室内出土铁器 (2) .....                    | 127 |
| 第 99 図  | 野首 1 号埴立室内出土铁器 (3) .....                    | 129 |
| 第 100 図 | SC2出土堆積実測図 .....                            | 130 |
| 第 101 図 | 中世・近世の堆积分布図 .....                           | 132 |
| 第 102 図 | 中世 1 期堆积実測図 .....                           | 133 |
| 第 103 図 | SB 1 実測図 .....                              | 135 |
| 第 104 図 | SB 2・SC 32 実測図および SC 32 出土堆積 .....          | 136 |
| 第 105 国 | 五輪塔・板磚検出状況 .....                            | 139 |
| 第 106 国 | 板砖実測図 .....                                 | 139 |
| 第 107 国 | 五輪塔内部実測図 .....                              | 140 |
| 第 108 国 | 開達新記事 .....                                 | 141 |
| 第 109 国 | 近世以降の土坑出土 .....                             | 143 |
| 第 110 国 | 近世以降の土坑出土遺物 .....                           | 144 |
| 第 111 国 | 道 断面図 .....                                 | 145 |
| 第 112 国 | 道 平面図 .....                                 | 146 |
| 第 113 国 | 出土滑石器実測図 .....                              | 148 |
| 第 114 国 | 近代はか出土遺物実測図 .....                           | 149 |
| 第 115 国 | ピット状堆积平面図 .....                             | 150 |
| 第 116 国 | 高崩陥便鉄道路の位置 .....                            | 151 |

## 表 目 次

|                            |     |
|----------------------------|-----|
| 第1表 試掘調査のトレンドの概要           | 12  |
| 第2表 碓部調査のトレンドの概要           | 12  |
| 第3表 古石器Ⅰ期の礫・礫群属性一覧         | 16  |
| 第4表 古石器Ⅰ期の礫群石材構成比          | 16  |
| 第5表 古石器Ⅰ期石器石材分類            | 19  |
| 第6表 古石器Ⅰ期の石材と人間行動の復元       | 20  |
| 第7表 古石器Ⅰ期遺物観察表(1)          | 20  |
| 第8表 古石器Ⅰ期遺物観察表(2)          | 25  |
| 第9表 古石器Ⅰ期礫石分類              | 27  |
| 第10表 古石器Ⅱ期眞貝岩の工程           | 32  |
| 第11表 古石器Ⅱ期遺物観察表(1)         | 32  |
| 第12表 古石器Ⅱ期遺物観察表(2)         | 38  |
| 第13表 古石器Ⅱ期の石材と人間行動の復元      | 39  |
| 第14表 積石臼居遺物観察表             | 43  |
| 第15表 SA101出土土器観察表          | 43  |
| 第16表 SA101出土土器観察表          | 43  |
| 第17表 積石遺物観察表               | 54  |
| 第18表 土坑観察表                 | 60  |
| 第19表 細文土器観察表(1)            | 67  |
| 第20表 細文土器観察表(2)            | 70  |
| 第21表 細文土器観察表(3)            | 75  |
| 第22表 細文土器観察表(4)            | 76  |
| 第23表 細文土器観察表(5)            | 78  |
| 第24表 細文土器観察表(6)            | 80  |
| 第25表 細文土器観察表(1)            | 84  |
| 第26表 石斧頭部状観察表              | 91  |
| 第27表 細文石器観察表(2)            | 95  |
| 第28表 細文石器観察表(3)            | 96  |
| 第29表 細文石器観察表(4)            | 97  |
| 第30表 弥生時代出土遺物観察表           | 98  |
| 第31表 古墳時代住居一覧              | 100 |
| 第32表 古墳時代住居出土遺物観察表(1)      | 103 |
| 第33表 古墳時代住居出土遺物観察表(2)      | 104 |
| 第34表 古墳時代住居出土遺物観察表(3)      | 105 |
| 第35表 古墳時代住居ほか川上遺物観察表       | 116 |
| 第36表 調査内採集遺物観察表            | 117 |
| 第37表 野首1号墳の石室構造過程          | 119 |
| 第38表 野首1号墳周溝内出土遺物観察表       | 125 |
| 第39表 野首1号墳玄室内出土遺物観察表       | 125 |
| 第40表 鳥巣跡の流れ                | 127 |
| 第41表 野首1号墳玄室内出土鉄製武器・馬具類観察表 | 131 |
| 第42表 SC28出土鉄製馬具類観察表        | 131 |
| 第43表 中世Ⅰ期遺物観察表             | 133 |
| 第44表 墨立柱建物一覧               | 134 |
| 第45表 五輪塔・板碑・石碑調査表          | 138 |
| 第46表 近世以前の土坑および出土獣骨の概要     | 144 |
| 第47表 近世以前の土坑および出土獣骨の概要     | 144 |
| 第48表 出土陶器観察表               | 147 |
| 第49表 近代はか出土遺物観察表           | 149 |
| 第50表 野首第1遺跡の年表             | 153 |
| 第51表 小丸川流域の積穴石室の比較         | 155 |

## 図 版 目 次 (遺構)

|     |                           |
|-----|---------------------------|
| 図版1 | 旧石器調査グリッド(A2区)            |
|     | 旧石器調査風景                   |
|     | A2区旧石器Ⅱ期遺物出土状況            |
|     | A2区古石器Ⅰ期遺物出土状況            |
|     | 旧石器Ⅱ期縹跡(S18)              |
|     | 旧石器Ⅱ期縹跡(S19)              |
|     | 旧石器Ⅰ期縹跡(S11)              |
|     | 旧石器Ⅰ期縹跡(S13)              |
|     | 整穴住居(SA101)               |
|     | 聚穴内遺物出土状況(SA101)          |
|     | 土坑(SC14・17)               |
|     | 上坑(SC29)                  |
|     | 集石遺構(SI14・15・17)          |
|     | 集石遺構(SI32・38)             |
|     | 集石遺構(SI7)                 |
|     | 集石遺構(SI2)                 |
|     | 集石遺構(SI26)                |
|     | 集石遺構底石(SI26)              |
|     | 集石遺構(SI27)                |
|     | 集石遺構(SI33)                |
|     | 集石遺構底石(SI44)              |
|     | 集石遺構底石(SI45)              |
|     | 集石遺構(SI48・49)             |
|     | 集石遺構底石(SI48・49)           |
|     | 集石遺構(SI46・47)             |
|     | 集石遺構底石(SI46・47)           |
|     | 集石遺構底石(SI46)              |
|     | 集石遺構底石(SI47)              |
|     | 集石遺構底石(SI50)              |
|     | 集石遺構底石(SI50)              |
|     | 弥生時代土坑遺物出土状況              |
|     | 弥生時代上層糞中検出状況              |
| 図版5 | 野首1号 sondage出状況           |
|     | 野首1号 sondage交差景           |
|     | 野首1号 sondage玄室右壁から奥壁      |
|     | 野首1号 sondage左壁から奥壁        |
|     | 野首1号 sondage室内遺物出土状況(右奥壁) |
|     | 野首1号 sondage室内遺物右上状況(左奥壁) |
|     | 野首1号 sondage側壁上層断面        |
|     | 野首1号 sondage構造物・川土状況      |
| 図版6 | 野首2号墳の現状                  |
|     | 古墳中期堅穴住居(SA1)             |
|     | 古墳中期堅穴住居(SA2)             |
|     | 古墳中期梯状扶手構(SE1)            |
|     | 古墳中期堅穴住居(SA4)             |
|     | 古墳終末期堅穴住居(SA10)           |
|     | 古墳終末期堅穴住居(SA13)           |
|     | SA13土壌埋設段面                |
|     | 墨立柱建物から木城町高城方面をのぞむ        |
|     | 墨立柱建物(SB1)                |
|     | SB1の柱穴①・②断面               |
|     | SB2の柱穴③断面                 |
|     | 墨立柱建物(SB2)・柱穴⑤            |
|     | 墨立柱建物(SB2)・柱穴⑥            |
|     | 丘陵へ上がる道(B区)               |
|     | 丘陵へ上がる道と集謙(B区)            |
| 図版8 | 五輪塔・板碑                    |
|     | 新潟道筋に移設された五輪塔・板碑          |
|     | 溝状遺構(SE5)                 |
|     | 近世以前の土坑群                  |
|     | 近世以前の土坑(SC1)              |
|     | 近世以前の土坑(SC3) 犀骨出土状況       |
|     | B区にあった「氏神さま」              |
|     | 生物痕跡                      |

## 図版目次(遺物)

|      |                            |                          |
|------|----------------------------|--------------------------|
| 図版9  | 旧石器Ⅰ期の石器(1)<br>旧石器Ⅰ期の石器(2) | 縄文石器(5)<br>縄文石器(6)       |
| 図版10 | 旧石器Ⅰ期の石器(3)                | 縄文石器(7)                  |
| 図版11 | 旧石器Ⅰ期の石器(4)                | 縄文土器(8)                  |
| 図版12 | 旧石器Ⅰ期の石器(5)                | 縄文土器(9)                  |
| 図版13 | 旧石器Ⅰ期の石器(6)                | 縄文土器(10)                 |
| 図版14 | 旧石器Ⅱ期の石器(1)                | 縄文土器(11)                 |
| 図版15 | 旧石器Ⅱ期の石器(2)                | 縄文土器(12)                 |
| 図版16 | 旧石器Ⅱ期の石器(3)                | 縄文石器(13)                 |
| 図版17 | 旧石器Ⅱ期の石器(4)                | 縄文石器(14)                 |
| 図版18 | 旧石器Ⅱ期の石器(5)                | 縄文石器(15)                 |
| 図版19 | 旧石器Ⅱ期の石器(6)                | 縄文石器(16)                 |
|      | 旧石器Ⅱ期の石器(7)                | 縄文石器(17)                 |
|      | 縄文土器(1)                    | 縄文石器(18)                 |
|      | 縄文土器(2)                    | SA10I出土縄文石器              |
|      | 縄文土器(3)                    | 弥生土坑出土土器                 |
|      | 縄文土器(4)                    | 弥生土器集中出土遺物               |
|      | 縄文土器(5)                    | 図版23 SA1出土土器             |
|      | 縄文土器(6)                    | SC7出土土器                  |
|      | 縄文土器(7)                    | SA4出土土器                  |
|      | 縄文土器(8)                    | SA6出土土器                  |
|      | 縄文土器(9)                    | SA5出土土器                  |
|      | 縄文土器(10)                   | 図版25 SA10II出土器(588は埋設土器) |
|      | 縄文土器(11)                   | SA13出土土器(593は埋設土器)       |
|      | 縄文土器(12)                   | 図版26 文室内出土須恵器(提瓶は青銅内出土)  |
|      | 縄文土器(13)                   | 文室内出土馬具類                 |
|      | 縄文土器(14)                   | 図版27 文室内出土武器類(1)・装身具     |
|      | 縄文土器(15)                   | 文室内出土武器類(2)              |
|      | 縄文土器(16)                   | 図版28 周溝内出土大甕             |
|      | 縄文土器(17)                   | 大甕の接写(輪状の焼成痕跡)           |
|      | 縄文土器(18)                   | 図版29 板碑・五輪塔(1)           |
|      | 縄文土器(19)                   | 図版30 板碑・五輪塔(2)           |
|      | 縄文土器(20)                   | 図版31 中世Ⅰ期の土器             |
|      | 縄文土器(21)                   | SC32出土陶磁器(1)             |
|      | 縄文土器(22)                   | SC32出土陶磁器(2)・青銅製品        |
|      | 縄文石器(1)                    | 近世以降の土坑出土の釘              |
|      | 縄文石器(2)                    | 近世以降の土坑出土遺物              |
|      | 縄文石器(3)                    | 近世～近代の出土遺物               |
|      | 縄文石器(4)                    | 図版32                     |

## 挿入図版目次

|              |     |
|--------------|-----|
| 遺構分布状況       | 40  |
| 鉄器処理過程       | 128 |
| 導X線透過画像      | 129 |
| SB1柱穴①炭化材の断面 | 137 |

## 第Ⅰ章 はじめに

### 第1節 調査に至る経緯（と保存協議）

本遺跡は、県道木城高鍋線道路改良に伴い発掘調査を実施したものである。この工事は、東九州自動車道小丸川橋建設予定地と交差する部分であり、日本道路公団宮崎工事事務所の橋梁工事の工程と調整をしながら、平成11年6月17日に文化課と高鍋土木事務所で遺跡の取扱について協議を行った。

協議を受けて文化課は、平成11年9月に試掘調査を実施し、遺跡の存在を確認した。試掘調査の後、平成11年10月15日に文化課と高速道対策局、高鍋土木事務所で具体的な発掘調査と施工期間の打ち合わせを行った。協議の結果、平成12年度に発掘調査を開始し同年度中に終了させることになり、平成12年4月20日付けで高鍋土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査の依頼文書が提出され、同年5月24日付けで発掘調査を実施するよう県教育長名で土木事務所長あてに通知した。発掘調査は埋蔵文化財センターが同年7月3日に開始した。

調査が進展するにつれ、試掘調査では検出されなかった、一部削平された横穴式石室を持つ円墳が現れた。

検出された横穴式石室は、奥壁2.2m、羨道まで含めた現存長が6.7mを計る県内でも4番目に相当する最大級の規模を持つものであり、残存状況も良好であった。また、この古墳の近くの斜面にも一つ石室が確認され、県内初例となる横穴式石室を内部主体とする群集墳の可能性があったので、現地保存について協議を持つことになった。

平成12年10月26日に現地で高鍋土木事務所と文化課、埋蔵文化財センターで石室の保存について協議を行った。協議の中で文化課から、工法の変更により石室及び周溝を含めた古墳全体の保存が可能であるのか提案があり、土木事務所が検討を行うこととなった。11月6日には、日本道路公団、高速道対策局、東九州自動車道用地事務所を加え、石室保存の協議を行った。11月24日には現地で高鍋土木事務所と高鍋町教育委員会、文化課で協議を行い、土木事務所から周溝を含む古墳全体を保存できるよう本課協議により設計変更を行う予定であるとの考えが示された。

その後、土木部本課と土木事務所の設計変更協議の結果、古墳が現地で保存できるよう県道改良事業の変更が決定し、周溝を含んだ横穴式石室が保存できることとなった。

### 第2節 調査の組織

調査の組織は、次のとおりである。

野首第1遺跡発掘調査<sup>く</sup>平成12年度

宮崎県埋蔵文化財センター

|                      |        |
|----------------------|--------|
| 所長                   | 矢野 剛   |
| 副所長兼総務課長             | 勢地 茂仁  |
| 副所長兼調査第二課長           | 岩永 哲夫  |
| 調査第一課長兼調査第一係長        | 面萬 哲郎  |
| 総務課総務係長              | 龜井 雄子  |
| 調査第一課調査第二係長          | 長津 宗重  |
| 調査第一課調査第二係主任主事（調査担当） | 田中 光   |
| 調査第一課調査第一係主事（調査担当）   | 藤木 啓   |
| 調査第一課調査第二係主事（確認調査担当） | 今堀屋 駿行 |
| 調査員（嘱託）              | 秋成 雅博  |

野首第1遺跡整理作業<平成13年度>

宮崎県埋蔵文化財センター

所長  
副所長兼総務課長  
副所長兼調査第二課長  
調査第一課長  
総務課総務係長  
調査第一課調査第一係長  
調査第一課調査第二係長  
調査第二課調査第三係主任主事  
調査第一課調査第一係主事

矢野 剛  
菊地 茂仁  
岩永 哲夫  
面萬 哲郎  
龜井 雄子  
谷口 武範  
長津 宗重  
田中 光  
藤木 聰

野首第1遺跡報告書作成<平成14年度>

宮崎県埋蔵文化財センター

所長  
副所長兼総務課長  
副所長兼調査第二課長  
調査第一課長  
総務課総務係長  
調査第一課調査第一係長  
調査第一課調査第二係長  
調査第二課調査第三係主任主事  
調査第一課調査第一係主事

米良 弘康  
大薗 和博  
岩永 哲夫  
児玉 章則  
野澤 文博  
谷口 武範  
長津 宗重  
田中 光  
藤木 聰

野首第1遺跡報告書作成<平成15年度>

宮崎県埋蔵文化財センター

所長  
副所長兼総務課長  
副所長兼調査第二課長  
調査第一課長  
総務課主幹兼総務係長  
調査第一課調査第一係長  
調査第一課調査第二係長  
調査第二課調査第三係主任主事  
調査第一課調査第一係主事

米良 弘康  
大薗 和博  
岩永 哲夫  
児玉 章則  
石川 恵史  
谷口 武範  
長津 宗重  
田中 光  
藤木 聰

調査指導

坂井 秀弥（文化庁）

調査協力

高鍋町教育委員会

## 第II章 調査の概要

### 第1節 地理的環境

宮崎平野は九州山地の東側に広がる平野である。宮崎平野には北から小丸川・一ヶ瀬川・大淀川・加江田川などの大小の河川が北西から南東に流れ、日向灘に注いでいる。また、宮崎平野の北部には洪積台地や海成段丘が多く分布している。これらの中位段丘面は標高50~100mであり、西都原・新田原・三財原などがある。小丸川は日向山地を源流に宮崎平野の北部を日向灘に向かって、北西から南東に流路をとる河川であり、上・中流において深い峡谷（V字谷）を形成し、下流一帯に沖積平野が広がっている。この平野を取り囲むような形で小丸川の右岸には牛牧台地や中尾台地が、左岸には持田台地などの洪積台地が形成されている。

本遺跡は小丸川右岸に形成された標高約30mの舌状丘陵上に位置する。この舌状丘陵は宮崎層群の上に河岸段丘等の段丘堆積物による砂礫層が形成され、ローム層が堆積し、現在に至っている。（層序の詳細については後述する。）調査地からは北西側に中世の山城跡である高城（木城町）が望観でき、その背後には尾鈴山をはじめとする九州山地を遠望することができる。丘陵の南側は牛牧台地に続いている。

東側には高鍋町の市街が広がり、遠くに日向灘を望むことができる。調査地周辺の丘陵裾部には涌水が多く、また小丸川に近いこともあり、人々が古くから生活していたことが容易に想像できる。

## 第2節 歴史的環境

前述の地理的環境を踏まえて、調査地の変遷を周辺の遺跡や史跡について後期旧石器時代から概観しながらたどりたい。

後期旧石器時代の遺跡としては持田中尾遺跡・妻道南遺跡が調査されている。持田中尾遺跡ではナイフ形石器・角錐状石器・搔耙等が出土している。ナイフ形石器はホルンフェルスの横長剥片を素材としており瀬戸内技法との関連をうかがわせるものである。妻道南遺跡ではナイフ形石器・剥片・石核等が出土している。ナイフ形石器は日東産黒曜石製で全長8.0cmという大型のものである。

縄文時代の遺跡としては耳裁遺跡・大戸ノ口第2遺跡などがある。耳裁遺跡は牛牧台地にある遺跡であり、手向山式土器が採集されている。近年の下耳切第3遺跡の調査でも縄文時代早期の集石遺構、縄文時代中期の集落跡（竪穴住居跡7軒）などが検出されている。遺物は船元式土器等が出土している。大戸ノ口第2遺跡も牛牧台地にある遺跡であり、縄文時代早期の礫群や集石遺構が検出されている。遺物は押型文土器・貝殻文土器・塞ノ神式土器等が出土している。

弥生時代の遺跡としては持田中尾遺跡がある。持田中尾遺跡は弥生時代前期末～中期の遺跡であり、竪穴住居跡2軒が検出された。遺物は磨製石鎌・石剣・石包丁・磨製石斧・打製石斧・打欠石錘・砾石等の石器類が豊富に出土している。

古墳時代の遺跡としては周辺に古墳群が多数点在する。小丸川右岸（本遺跡と同岸）に牛牧古墳群・山王古墳群・老瀬横穴墓群などが、対岸（小丸川左岸）の丘陵上には持田古墳群や川南古墳群などがある。牛牧古墳群は牛牧台地上にあり、前方後円墳1基、円墳13基を数える。山王古墳群は牛牧台地より東側に1段下がった山干地区に広がり、前方後円墳3基、円墳9基を数える。老瀬横穴墓群は牛牧台地の北縁にあり、横穴墓12基が確認されている。持田古墳群は主に持田台地上に広がる前方後円墳10基、円墳75基からなる古墳群である。副葬品として鏡が特筆され、画文帶神獸鏡・変形獸首鏡・景初四年銘盤竈鏡など34枚が出土している。川南古墳群は国光原台地縁辺の周辺に広がり、前方後円墳25基、方墳1基、円墳25基から構成される。県内の他の古墳群に比べて前方後円墳の比率が高く、分布域が狭いのが特徴である。

中世になると周辺に高城（山城）をはじめとする「耳川（高城）の戦い」に関連する遺跡・遺構が多数あることから、調査地周辺に関連する施設があったとも考えられる。この丘陵から小丸川近くにかけての字名は「野首」となっていることから、山城関連の施設であったことも想定できる。（実際に調査地は眺望が利き交通の要所でもある。）また、調査地の東側斜面にはかつての県道工事の際に移設された五輪塔群があった。この五輪塔群は地元の住民の方には『百濟王の娘の墓』という伝承が残っており、現在も信仰の対象となっている。移設前は丘陵下を通っていた旧県道沿いにあったということである。

近世には牛牧台地の東側縁辺にある高鍋城（財部城）を秋月氏が居城とした。調査地付近も高鍋藩となつた。調査地の近辺には「殿様が通った道」「殿様が休憩して水を飲んだ所」や「代官所」などと周辺の住民の方に伝わっている土地がある。調査地の南側の牛牧台地は地名が示すように、藩政策により開かれた「牧」の1つがあつたと考えられる。また、耕地面積の拡大のため、調査地周辺にも溜池（堤）

や灌漑用水（井手）が作られている。

明治時代には宿坂（調査地の東隣付近か）に清水尋常小学校が開設（明治28年）されたという記録が残っている。大正末期～昭和初期には小丸川沿い（高鍋木城間）に軽便鉄道の建設計画があり、昭和3年に起工式も行われている。調査地の近辺に堀切があり、この鉄道の敷設工事によるものと考えられる。（調査の当初はこの堀切は山城関連のものではないかと考えていた。地元の住民の方は第二次世界大戦時に掘ったものと認識していた。）

現在、調査地の行政区は高鍋町となっており木城町に隣接している。昭和（戦後）に行われた開拓によって、調査地は上部が平坦に造成され、ビニールハウスによる野菜の栽培や果樹の栽培が行われていた。東側斜面は雑木林になっていた。前回の県道工事の際に移設された五輪塔群もこの斜面の雑木林の中にあった。東側斜面から北側斜面にかけては急傾斜であり、丘陵端部を垂直に切り取り県道が通してある状態であった。

また、近年、東九州自動車道関連で本遺跡に隣接する複数の遺跡が調査されており、平成14年度時点でのその概要を記述する。

遺跡北側の、県道をはさんだ低地の青木遺跡は、縄文時代早期の集石遺構、中世の掘立柱建物跡・土坑・土壙墓・石組遺構が確認されている。中世の遺構群は河川の通行や対岸を意識した集落など交通の拠点的な施設であった可能性が指摘されている。

遺跡南側の谷地にあたる野首第1遺跡は、縄文時代早期の集石遺構、古墳時代後期の豊穴住居跡、近世の建物（屋敷）跡が検出されている。古墳時代の豊穴住居跡は隅丸方形プランであり、土器埋設炉が2基確認された。野首1号墳・2号墳直下の谷地にあることより、その性格が注目される。

丘陵付根の台地部分にあたる野首第2遺跡は、後期旧石器時代、縄文時代早期・後期・晚期、古墳時代中期、古代から中世にわたる遺跡である。縄文時代早期の100基近い炉穴・集石遺構や、縄文時代後期の豊穴住居群のほか、古代の縁結陶器・布目瓦など、遺構・遺物とともに大規模である。

今後、本遺跡の内容についても、これら調査遺跡との比較・検討が肝要である。

#### 〈参考・引用文献〉

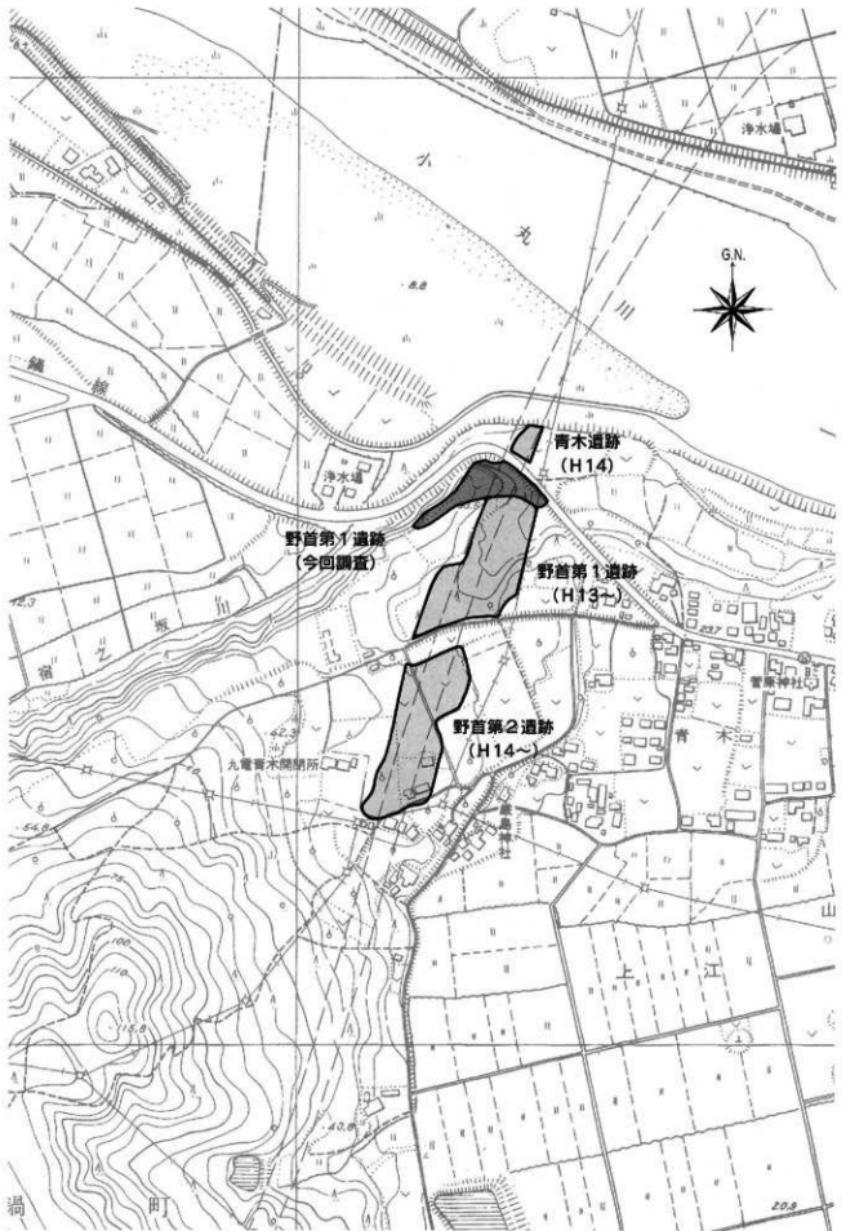
- 大淀川の歴史編集委員会 「大淀川の歴史」 1998  
茂山 謙 「児湯郡高鍋町の繩文土器」『宮崎考古』第2号 1977  
宮崎県史刊行会 『宮崎県史』資料編 考古1 1989  
宮崎県教育委員会 「宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書II」詳説編 1999  
高鍋町教育委員会 「高鍋町遺跡詳細分布調査報告書」 高鍋町文化財調査報告書 1989  
高鍋町教育委員会 「大戸ノ口第2遺跡」 高鍋町文化財調査報告書 1991  
高鍋町教育委員会 「妻道南遺跡」 発掘調査報告書 1986  
高鍋町教育委員会 「持田中尾遺跡」 発掘調査概要報告書 1982  
高鍋町教育委員会 「中尾・牛牧地区遺跡」 1995  
高鍋町史編さん委員会 「高鍋町史」 1987  
木城町教育委員会 「町内遺跡詳細分布調査報告書」 木城町文化財調査報告書 1998  
川南町教育委員会 「川南町の文化財」 遺跡詳細分布調査報告書 1983  
宮崎県埋蔵文化財センター 「東九州自動車道（都農～西都間）関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書III」 2002



- |                   |                |                   |
|-------------------|----------------|-------------------|
| 1 : 野首遺跡 (本遺跡を含む) | 3 : 老瀬横穴墓群     | 4 : 牛牧古墳群         |
| 2 : 山王古墳群         | 6 : 耳戴遺跡       | 7 : 牛牧原遺跡         |
| 5 : 北牛牧第1遺跡       | 9 : 高鍋 (財部) 城跡 | 10 : 水谷原第2遺跡      |
| 8 : 大戸ノ口第2遺跡      | 12 : 持田古墳群     | 13 : 持田中尾遺跡       |
| 11 : 妻道南遺跡        | 15 : 上ノ別府遺跡    | 16 : 川南古墳群        |
| 14 : 東光寺遺跡        | 18 : 永山古墳      | 19 : 木城村古墳27号・60号 |
| 17 : 高城跡          | 46 : 野首第1遺跡    | 47 : 野首第2遺跡       |
| 45 : 青木遺跡         | 51 : 下耳切第3遺跡   | 52 : 北牛牧第5遺跡      |
| 50 : 老瀬坂上遺跡       | 54 : 唐木戸第2遺跡   | 55 : 唐木戸第3遺跡      |
| 53 : 唐木戸第1遺跡      | 58 : 小並第1遺跡    | 60 : 牧内第1遺跡       |
| 56 : 唐木戸第4遺跡      |                |                   |

※ 45~60は東九州自動車道関連の遺跡。現在 (H 15)、発掘 (本掘)  
調査終了または調査中のものである。

第1図 遺跡位置図 (S=1/50,000)



第2図 周辺地形図 (S=1/5,000)



第3図 明治時代の遺跡周辺地形図 (S=1/50,000)

### 第三章 調査の方法と経過

#### 第1節 調査の方法

調査区は丘陵平坦面から斜面にわたるため、平坦面西半分をA1区、東半分をA2区、斜面をB区と便宜的に分けた。このA1・A2・B区の区分は、包含層掘削や遺構精査などの現場作業から、センターでの最終的な整理作業まで用いた。

グリッド杭は、国土座標を基準とし10m間隔で設定した。遺構は、原則半裁したうえで掘り上げた。遺構埋土中の遺物は、床面付近のものは遺構実測図中に図化し取上げたほかは遺構一括とした。包含層中の遺物は平板で取上げた。遺構実測図の作成は、グリッド杭を利用して調査区を $10\text{m} \times 7\text{m}$ の範囲(A2サイズの方眼紙1枚分)に分割し、すべて $1/20$ で記録した。主要な遺構については $1/10$ で記録した。B区の道は民間業者に写真測量を委託した。写真での記録は適宜行ない、 $6 \times 6$ 版モノクロ・カラー、35mmモノクロ・リバーサル・カラー写真を併用した。遺跡の俯瞰等の空中写真については業者に委託して行なった。

## 第2節 調査の経過

調査は平成12年8月4日から始めた（試掘・確認調査については第IV章で後述する）。本遺跡は、試掘・確認調査の結果から、旧石器～縄文時代を主体とし、ほかに弥生～古墳時代、古代、中世にまたがる遺跡であること、特に中世は「高城の戦い」に関連した施設の存在が予想されていた。

調査はまず、A1・A2区の表土を重機で除去することからはじめた。その結果、A1・A2区全面にわたって集石遺構10基以上・散疊、土坑12基以上・竪穴住居4軒、ビット群多数が確認され、A2区南側には巨石が額を出す黒色土の広がりも検出された。B区は無数の疊が散在する状態であり、作業員で表土剥ぎを行なったうえで遺構精査した。調査期間中の9月から10月にかけては雨が多く、9月中旬・11月頭の台風接近や、9月21日には大雨のため事務所が水没しかけるなど、悪天候に悩まされることも多かった。

表土直下の遺構の分布状況については9月中にほぼ把握でき、順次、集石・散疊、竪穴などの明確な遺構から調査を進めた。その過程で、土色に日が慣れるにつれ、炉穴群など一見すると周辺の土質と大差ない埋土を持つ遺構が徐々に確認されはじめた。さらに、散疊を剥ぐと集石・炉穴が検出され、確認遺構数は激増することとなった。工事の都合上、B区は11月30日に完掘・終了し、さらに西に向かってA2、A1区の順で調査を進めた。

A2区南側の黒色土の広がりは10月頭より調査に入った。表土除去時に露出した巨石は、墳丘を削られた横穴式石室の一部であると判明し、この段階で、確認調査T10で弥生時代の溝かと推測した箇所も古墳の周溝と変更した。古墳が確認されることはまったくの予想外であり、調査区外の東側谷部にも同様の古墳が群をなす可能性が注意された。

調査の中で、横穴式石室や周溝について現地保存の方向性が打ち出され、10月後半より数次にわたって保存に関する協議が実施された。その結果、周溝部分までを残すような路線変更が実現した。

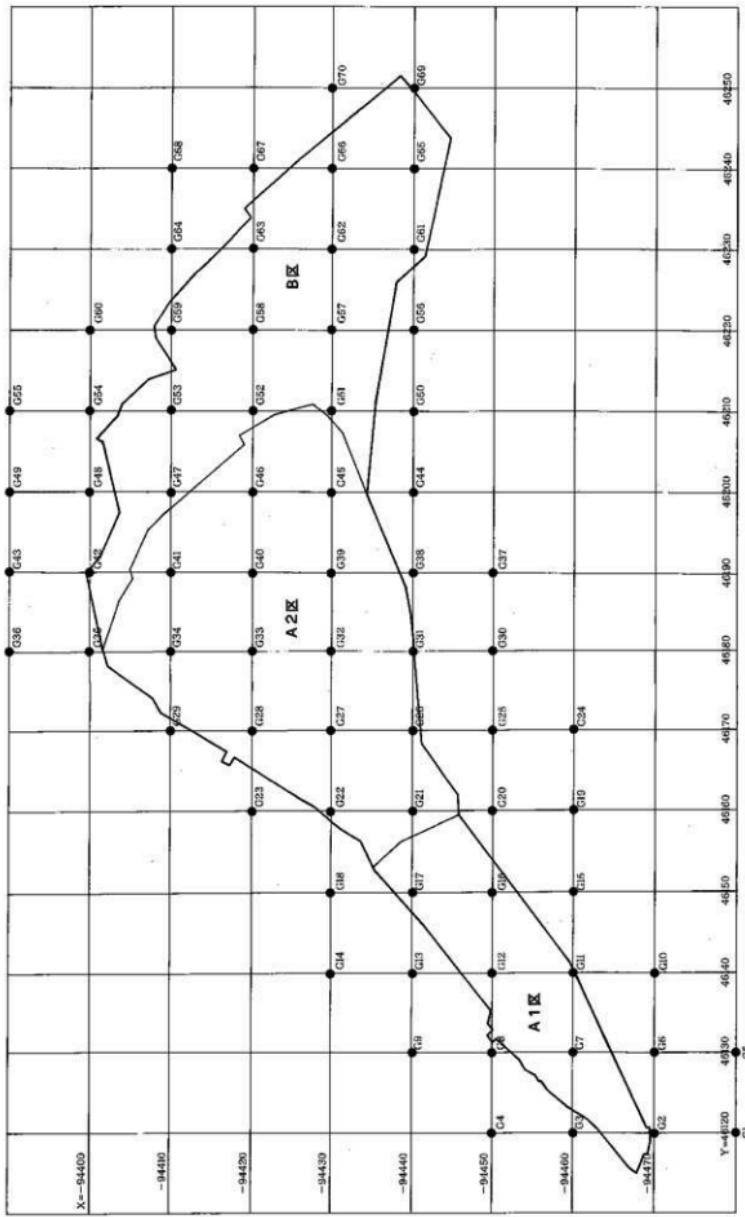
旧石器包含層の調査は、遺構精査の終了したグリッドから順次進めた。A2区については、始良Tn上下にわたる石器群を完掘した。掘り下げは基本的に手グワで行ない、先行トレンチで遺物密度のうすかったA1区については、始良Tn上位包含層を重機で除去した。重機で除去する際には、未見の疊群などの遺構に十分注意した。除去した始良Tn上位包含層の土は1ヶ所にまとめ置き、遺物の回収に努めた結果、少量の旧石器を得た。遺物に「原位置」としての情報はないが、少なくとも、A1区の始良Tn上位石器群であること、始良Tn下位石器群・A2区始良Tn上位石器群との比較は可能と考えた。これらの調査と平行して、A2区西隅により下位の石器群の有無を確認するトレンチを設定したが、砂疊層に到達し掘削を中止した。

調査期間は、11月30日終了予定を2週間延長し、12月15日にA1・A2区ともに始良Tn下位の遺物包含層を完掘した。同日には機材等の撤収を行ない、遺跡全体の調査を終了した。

なお、平成13年3月27日に、長崎大学長岡信治教授とともに、道路建設のため切り落とされた遺跡の断面を観察する機会を得た。その成果は第V章で詳述したい。



第4図 遺構配置図 (S=1/500)



第5図 グリッド配置図 (S=1/500)

### 第3節 調査日誌抄

- H12.06.30 確認調査を開始する。
- .07.03 テント等の撤入をする。トレーナーの設定、掘り下げを始める。
- .07.04 集石造構、土坑等の遺構を確認する。
- .07.11 弥生の溝と考えられる遺構を確認する。
- .07.12 確認調査（調査区域内の伐採等が遅れているため本調査に入れず、トレーナーを入れて状態を確認する）を終了する。
- .08.04 伐採木の搬出路を作るため、B区の一部のみ調査（トレーナー）を開始する。
- .08.08 古墳時代の住居（土器埋設炉）を検出する。
- .08.09 集石墓の可能性がある遺構を確認する。
- .08.10 百濟王の娘の墓？と伝えられている五輪塔の実測、写真撮影をする。
- .08.18 現場事務所等の設置。発掘機材の搬入（本調査のため）をする。
- .08.22 A2区から重機による表土剥ぎを開始する。
- .08.24 「高城の戦い」との関連を確認するため、老瀬坂上第2遺跡も含めて周辺を踏査する。
- .08.28 近世墓（石組み）と考えられる遺構を検出する。
- .08.29 重機による表土剥ぎを終了する。
- .09.01 A1区の遺構検出（住居跡3軒、集石造構10基以上、土坑7基等）をする。
- .09.02 A2区の遺構検出（住居跡1軒、土坑5基以上等）をする。
- .09.07 住居跡から掘り下げを始める。
- .09.08 この日（～10.02）から雨が多く作業が進まない。
- .09.13 台風接近のため、防災活動を行う。
- .09.18 調査区外ではあるが堀切らしきものを確認する。
- .09.19 遺構配置図の作成、集石の実測・写真撮影を始める。
- .09.21 大雨のため、現場事務所が水没の危機。
- .09.25 五輪塔の取り上げをする。
- .09.26 平板による遺物の取り上げを開始する。
- .09.29 近世の土坑を検出する。
- .10.03 近世墓とと考えていた遺構が埴石と石室上部を削られた横穴式石室、弥生の溝と考えていた遺構を周溝と確認する。
- .10.04 地形測量（委託）を開始する。周溝の掘り下げを行う。
- .10.06 石室内の崩落石をチェーンブロックで上げる。
- .10.12 B区の航空写真測量（委託）を行う。
- .10.13 石室内の遺物を取り上げる。
- .10.16 炉穴が検出され始める。
- .10.25 重機で東側暗渠色土を除去する。
- .10.26 横穴式石室の保存について文化課、高鍋土木事務所、埋蔵文化財センターの三者で協議する。
- .10.27 板井調査官（文化庁）が来訪される。
- .10.31 遺構配置図（1／20）の作成を本格化する。
- .11.01 台風接近のため、防災活動を行う。
- .11.07 1回目の空中写真撮影（委託）を行う。土坑、柱穴の遺構検出数が増加する。
- .11.08 A2区東側の地形測量図（コンタ）を作成する。この日から12月6日まで調査員を増員する。（最大で8人）
- .11.10 B区の地形測量を行う。集石墓とと考えていた遺構は石をはずした結果、道路状遺構（旧道）と判断する。
- .11.13 堀立柱建物跡の写真撮影をする。
- .11.16 旧石器の調査を開始する。（1グリッドのみ）
- .11.17 鐘文時代の住居跡を検出する。
- .11.20 県立図書館で遺跡に関する県古文書を調べる。
- .11.22 高城方面（遠景）を撮影する。
- .11.24 調査期間について文化課、高鍋土木事務所、埋蔵文化財センターで協議し、12月15日まで延長になる。
- .11.27 B区住居跡の実測をする。
- .11.30 重機で始良Tn火山灰層を除去する。
- .12.04 始良Tn火山灰層下位の掘り下げを始める。
- .12.05 旧石器群の検出、実測をする。
- .12.07 近世の土坑の実測をする。
- .12.08 2回目の空中写真撮影（委託）を行う。
- .12.11 排土運搬（搬出）をする。
- .12.13 土坑の掘り下げ、実測をする。遺物の取り上げをする。
- .12.14 取り残し図面の整理をし、土層断面図の作成をする。
- .12.15 周溝付近の遺構（土坑）を平板に実測する。発掘機材の撤収をし、現地における調査を終了する。

## 第IV章 試掘・確認調査

試掘調査は、文化課により平成11年9月に、確認調査は、埋蔵文化財センターにより平成12年6月30日～7月13日、同年8月7日～8月11日にそれぞれ行なわれた。調査面積は、試掘調査20m<sup>2</sup>、確認調査99m<sup>2</sup>、試掘・確認調査合計で112m<sup>2</sup>（調査対象範囲の約3.2%）となる。

確認調査の調査対象地は舌状丘陵であり、丘陵頂部には畠地となる平坦面が広がり、丘陵斜面は山林となっていた。そこで、7月に丘陵頂部の調査を先行させ、樹木伐採後の8月に丘陵斜面の調査を行なった。また、調査中に丘陵頂部の畠地を踏査した結果、縄文時代早期から古墳時代後期までの土器片・石器類、近世陶磁器などが表採され、丘陵先端部に板碑・五輪塔群を確認した。

試掘・確認調査の結果、舌状丘陵はT1-T4-T5-T3を結ぶラインを頂部とすること、遺跡は後期旧石器時代、縄文時代早期～後期にわたる遺構・遺物が主体であること、少ないながらも弥生時代後期、古墳時代後期、古代～中世の遺構・遺物も存在することが予想された。このほか、T10ではほぼ垂直に下がる壁面と浅い溝状の遺構が検出され、「高城の戦い」や「野首」という小字名から、曲輪の可能性も指摘された。また、板碑・五輪塔群については、確認調査期間中に記録を終了した。

第1表 試掘調査のトレンチの概要

※Bは文化課の実施したトレンチの略称

|     | 長辺×短辺×深さ       | 出土遺物・遺構            |
|-----|----------------|--------------------|
| B 1 | 2.0m×2.0m×0.9m | 耕作土直下から礫           |
| B 2 | 2.0m×2.0m×0.7m | 縄文後期土器、耕作土から縄文早期土器 |
| B 3 | 2.0m×2.0m×0.9m | -                  |
| B 4 | 2.0m×2.0m×0.7m | 縄文後期土器、赤化礫         |
| B 5 | 2.0m×2.0m×0.9m | 耕作土下は盛り土           |

第2表 確認調査のトレンチの概要

※Tは埋蔵文化財センターの実施したトレンチの略称

|     | 長辺×短辺×深さ       | 出土遺物・遺構               |
|-----|----------------|-----------------------|
| T 1 | 3.0m×2.0m×0.9m | ピット、土坑／削器             |
| T 2 | 3.0m×2.0m×0.8m | 集石、礫群（AT下位）／縄文土器、旧石器  |
| T 3 | 3.0m×2.0m×1.8m | 集石／縄文土器               |
| T 4 | 3.0m×2.0m×1.0m | 集石／縄文土器               |
| T 5 | 3.0m×2.0m×1.3m | 散礫／縄文石器？              |
| T 6 | 3.0m×2.0m×0.6m | 住居？／土師器、石器            |
| T 7 | 3.0m×2.0m×0.5m | ピット、土坑、住居？            |
| T 8 | 3.0m×2.0m×1.8m | 旧石器                   |
| T 9 | 3.0m×2.0m×0.5m | 耕作土下は盛り土              |
| T10 | 3.0m×2.0m×1.3m | 弥生後期の溝（本調査で古墳の周溝と判明）  |
| T11 | 3.0m×2.0m×0.5m | 曲輪（本調査で溝と判明）          |
| T12 | 3.0m×2.0m×0.5m | 集石／縄文土器               |
| T13 | 3.0m×2.0m×1.0m | 土坑（本調査の近世以降のSD1）／縄文土器 |
| T14 | 3.0m×1.0m×0.3m | 曲輪（本調査で道と判明）          |
| T15 | 3.0m×2.0m×0.5m | 住居（本調査のSA13）／土師器      |
| T16 | 3.0m×2.0m×0.3m | -                     |
| T17 | 3.0m×2.0m×1.1m | -                     |

## 第V章 層序

本遺跡の基本層序は、遺跡周辺で普通に見られる土層の堆積状況と同じである。調査範囲の表上を剥ぐと、A1区ではⅢ～IV層が、A2区では東から西に向かってⅡ～VII層が帶状に現れた。これは、旧地形が馬の背状の狭い丘陵であり、後的人的要因でその頂部を中心に削平されたためと考えられる。A区北西側には、山城の土塁ではないかとされた土手があり、断面には鬼界アカホヤ層より下層の自然堆積層が見られた。その観察から、本遺跡ではクロニガ（小白斑ローム）の発達はほとんどなく、鬼界アカホヤ火山灰もブロック状に堆積することやA区の削平が著しいことがわかった。これは、検出された遺構の大半は、本来の掘り込み面を失っていることを示している。

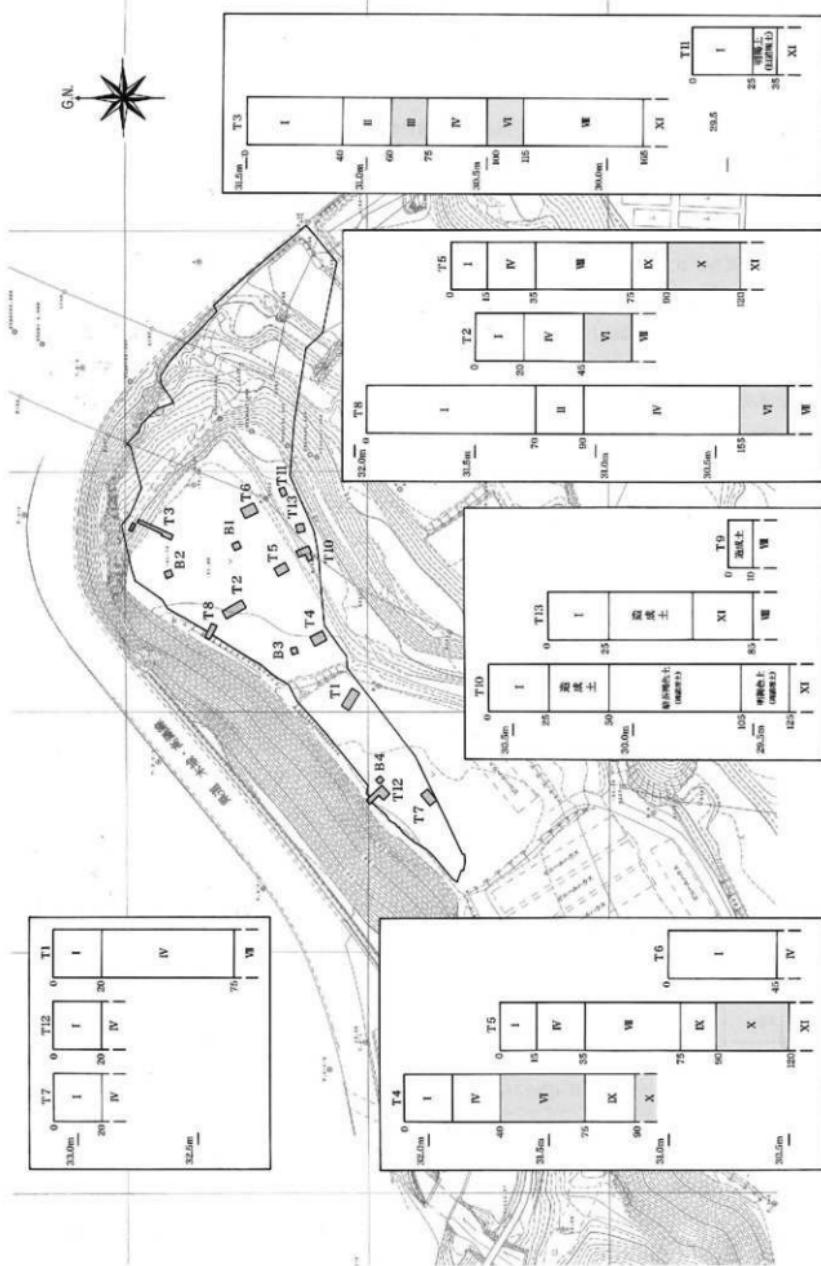
基本層序のうち、II層以上は確認調査のT3東壁から、III～X層はA1区のCトレンチ東壁（A1区北側）から、XI層以下は調査終了後の道路掘削に伴うカット面から記録した。この観察によって、本遺跡は岡富面（河岸段丘）に立地することが確認できた。なお、テフラ等に関する理化学的な分析は行っていない。

野首第1遺跡の基本的な層序は第6図のとおりである。以下で各層ごとに概説する。

|      |  |
|------|--|
| I    | 表土（耕作土）。層厚は約20cm。旧石器から近代までの遺物が混じる。   |
| II   | 黒色土層。サラサラの砂質である。A2区の東端～北端にかけて一部が残存する。クロボクに相当する。  |
| III  | 褐色土層（Hue7.5YR4/4）。粘性があり、かたくしまっている。層厚は約5～15cm。III層上～中部は縄文時代の遺物包含層である。A区の大半はIII層中～下部で削平されていた。確認調査のT3では、II～III層が連続して残存し、III層最上部には圓った鬼界アカホヤ火山灰のブロックが確認された。調査区全体が同様の状況であるかは不明である。 |
| IV   | 暗褐色土層（Hue7.5YR3/3）。粘性があり、かたくしまっている。上部に長径5mm程度の黄色浮石（小林軽石）を含む。層厚は約30～50cm。IV層下部からV層上面は旧石器包含層（後期旧石器時代二期）となる。  |
| V    | 黒褐色土層（Huel0YR3/1）。非常にかたくしまっている。白色の鉱物粒、黄橙色の軽石粒（長径3～5mm）を含む。VI層上にブロック状に堆積しており、調査区の場所によっては堆積していない。  |
| VI   | 褐色土層（Huel0YR4/4）。粘性があり、ややしまっている。粗粒であり、ざらざらしている。姶良Tn火山灰（AT）の降下火山灰層であり、調査区のA2区北側に層厚約35cmと最も厚く堆積し、西側に行くほど薄くなる。調査区の場所によっては残存していない。   |
| VII  | 黒色土層（Hue7.5YR2/1）。粘性があり、非常にかたくしまっている。縦にクラックを生じ、乾燥するとブロック状に割れる。白色の鉱物粒を含む。層厚は約20～35cm。ブラックバンドと呼ばれている部分である。VII層下部～VIII層上部は旧石器包含層（後期旧石器時代二期）である。                                 |
| VIII | 黒褐色土（Hue7.5YR3/1）。粘性があり、非常にかたくしまっている。縦にクラックを生じ、乾燥するとブロック状に割れる。白色の鉱物粒を少量含む。層厚は約20～45cm。VIII層以下は無遺物層となる。   |
| IX   | 明褐色土層（Hue7.5YR5/6）。粘性があり、しまっている。部分的に硬軟があり、スコリアが散在する。層厚は約5～15cm。  |
| X    | 赤褐色土層（Hue2.5YR4/6）。イワオコシスコリア。層厚はA1区のCトレンチ付近では約15cmであるが、A2区では東端付近では10cm程度となる。なお、イワオコシスコリアは明確に確認されていない。  |
| XI   | 明黄褐色土層（Hue2.5YR6/6）。粘性があり、しまりもある。風化した小礫を含む。  |
| XII  | 明黄褐色土層（Hue7.5YR7/6）。XII層に比べ、色調は白みを増す。  |
| XIII | 砂礫層。ラグドローム層。長径約3～5cmほどの亜円礫を含む。礫間はローム質であり、段丘礫層ではない。色調は若干黄緑みを帯びる。  |
| XIV  | 褐色土層。粘性があり、しまりもある。場所によってはピンクに近い色調をする。（Aso-4起源のローム層か？）  |
| XV   | 砂礫層。鶴卵～人頭大以上の巨礫を含む。尾鈴山巖性岩などの流紋岩系の礫が多く、礫間は砂である。層理が発達している。河成段丘礫層である。   |
| XVI  | 砂泥層。非常にかたくしまっている。色調は上部は褐～赤褐色、下部は青灰色。宮崎層群の砂泥互層である。  |

第6図 層序図

第7図 試掘・確認調査トレーンチ配置図(S=1/1,000)・土層性状図



第VI章 調査の記録

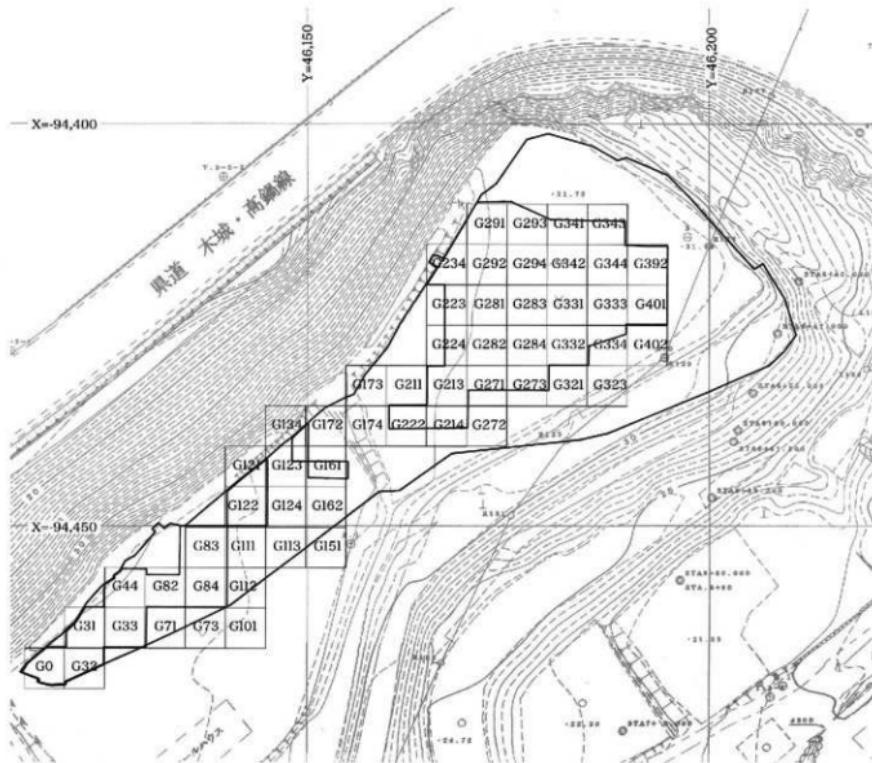
## 第1節 旧石器時代の遺構と遺物

始良Tn火山灰下位（VI～VII層）を旧石器時代Ⅰ期、始良Tn火山灰上位（III下～IV上層）を旧石器時代Ⅱ期とする。

## 1 旧石器時代Ⅰ期

調査面積など　始良Tn火山灰下位の包含層の調査は、VI・VII層を対象に先行調査の終了箇所から順次おこなった。VII層以下まで削平のおよぶ箇所などは調査対象から除外したため、最終的に、調査面積は約550m<sup>2</sup>となった。

**包含層位** 遺物はVI層上部からVII層中・下部あたりまで深度幅をもって包含され、砾群はVI層下部からVII層上部に集中して検出された。これらは出土層順から時期的に近い一群と考えられる。



第8図 旧石器Ⅰ期調査区位置図

**旧地形** 旧石器時代Ⅰ期の生活面は、礫群の検出されたVI層下部からVII層上部であろう。旧地形は、VI層下部の深度から復元して、丘陵頂部から先端に向かって緩やかに下がり、おおむね平坦である。

**礫** 級は調査範囲の全体に散漫にみられ、総数177点である。これらのうち、礫の密集度から7基(SI1～SI7)について礫群と判断した。礫群は、いずれも丘陵先端側に偏って分布し、分布に規則性などはみられない。

礫の赤化率は、礫群構成礫で約44% (89点中39点) と半数近くを占め、これに対し、散漫の赤化率は約13% (88点中12点) と低い。礫全体での赤化率は約29% (177点中51点) と低い。赤化礫は、尾鈴山酸性岩・砂岩に比較的多くみられた (30~35%)。礫の接合は9個体18点 (各個体2点ずつ接合) で確認され、いずれの接合例も30cm以内の近接した礫どうしのものであった。

礫群はいずれも掘り込みがなく、礫群径は約0.6m前後のものが多い。礫の密集度はさまざまで、礫の密集するもの (礫群SI2~4・6)、散漫なもの (SI1・5) がみられた。礫群SI3の密集度はとくに高い。炭化物は各礫群にまばらにみられ、とくに密集するようなことはなかった。タール等、礫への付着物もない。

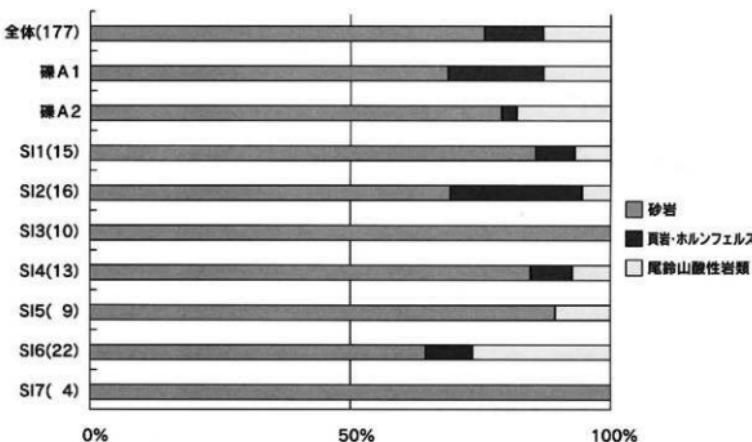
第3表 旧石器Ⅰ期の礫・礫群属性一覧

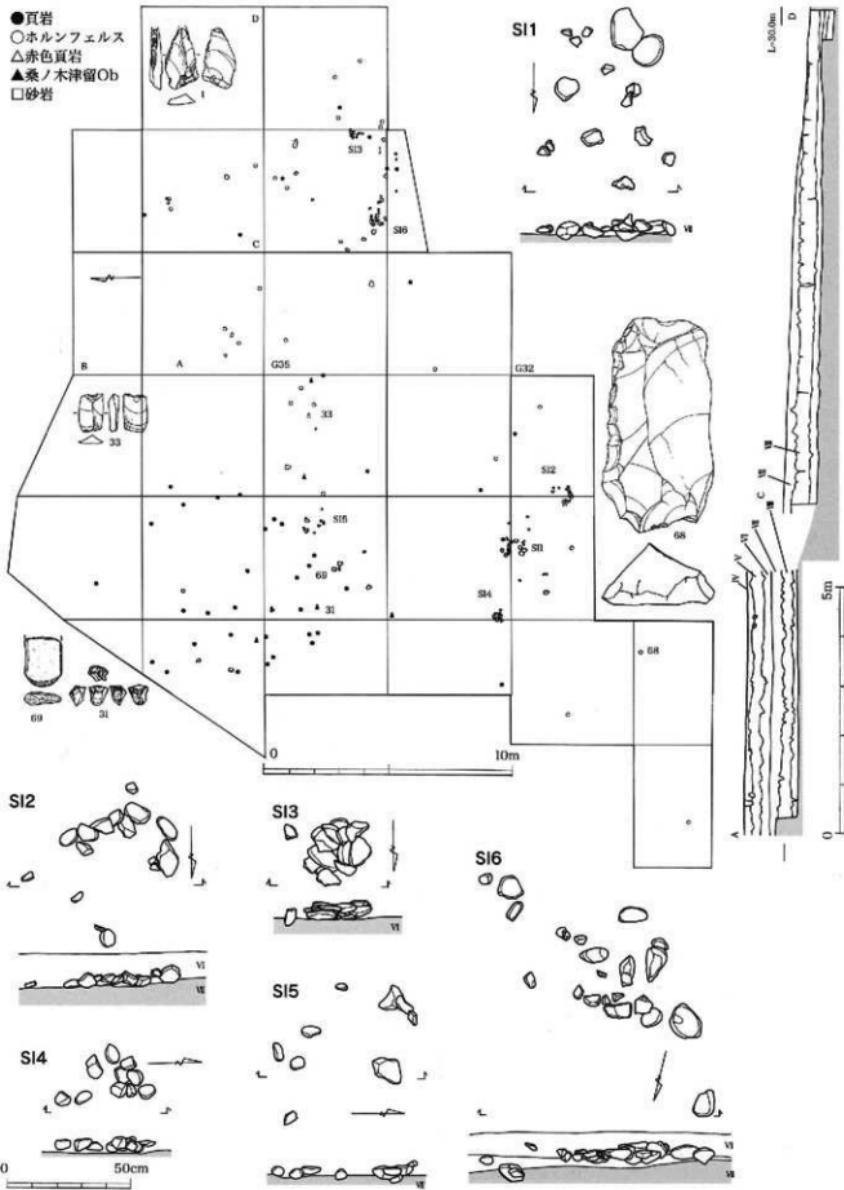
(単位は点)

| 礫群(数)    | 砂岩 | 頁岩・ホルンフェルス | 尾鈴山酸性岩類 | 赤化率 | 礫群(数)    | 砂岩  | 頁岩・ホルンフェルス | 尾鈴山酸性岩類 | 赤化率 |
|----------|----|------------|---------|-----|----------|-----|------------|---------|-----|
| SI1 (15) | 13 | 1          | 1       | 7   | SI6 (22) | 14  | 2          | 6       | 2   |
| SI2 (16) | 11 | 4          | 1       | 5   | SI7 (4)  | 4   | 0          | 0       | 2   |
| SI3 (10) | 10 | 0          | 0       | 7   | 礫A1 (54) | 37  | 10         | 7       | 8   |
| SI4 (13) | 11 | 1          | 1       | 9   | 礫A2 (34) | 27  | 1          | 6       | 4   |
| SI5 (9)  | 8  | 0          | 1       | 7   | 全體 (177) | 135 | 19         | 23      | 51  |

石質別赤化率 → 砂岩40 (30%) 頁岩・ホルンフェルス (16%) 尾鈴山酸性岩類 (35%)

第4表 旧石器Ⅰ期の礫群石材構成比

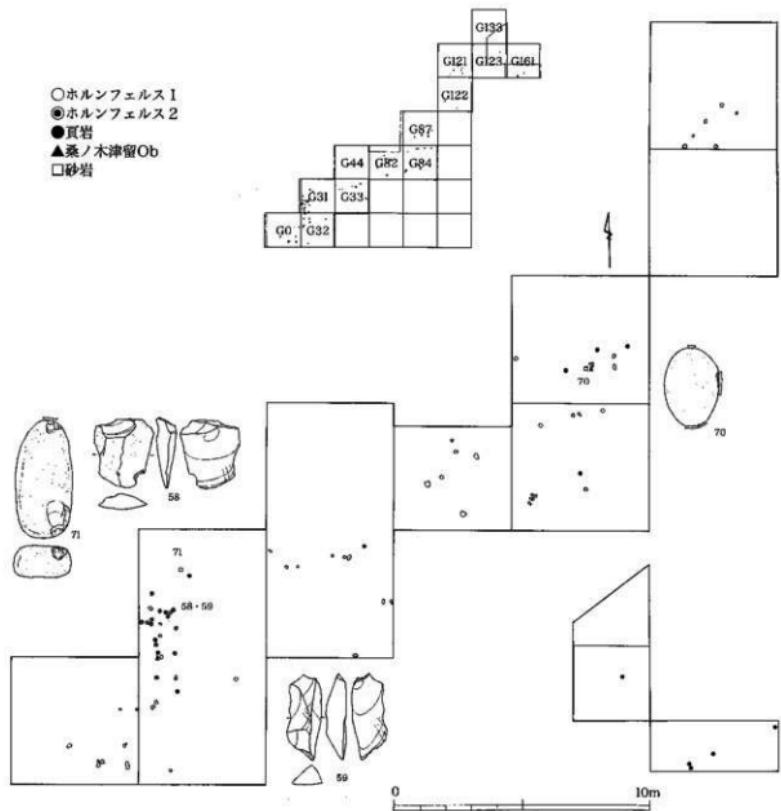




第9図 旧石器I期遺物分布図(1)・土層断面図・礫群実測図

**石器石材** 剥片石器の石材は頁岩(1~28)、桑ノ木津留産黒曜石(29~32)、赤色頁岩(33)、ホルンフェルス2(34~48・68)、ホルンフェルス1(49~67)、礫塊石器の石材は安山岩(69)、砂岩(70~72)である。

**遺物分布** 石器は、調査範囲のほぼ全面にわたって、平坦面を中心に散漫に分布する。第7・8表の出土位置はグリッドを示している。おもに、A2区に頁岩・ホルンフェルス2が多く、少數派として桑ノ木津留産黒曜石・赤色頁岩がある。A1区の多くはホルンフェルス1となる。A2区では頁岩製と桑ノ木津留産黒曜石製の分布範囲がおむね重なり、ホルンフェルス2製はかなり散漫に分布する。A1区のホルンフェルス1製は、剥片・石核などで構成される石器集中区をなしている。



第10図 旧石器I期遺物分布図(2)

第5表 旧石器Ⅰ期石器石材分類

| 石 材       |          | 特 徵 (分類基準)  |
|-----------|----------|---|
| 頁 岩       | 1~28     | 風化面が暗い青灰色をするもの、白い斑紋の入るものの一括した。新鮮面は黒い。ホルンフェルスに比べ、風化面がすべらかな一群をまとめた。 |
| 赤色頁岩      | 33       | 表面が小豆色をする。本遺跡では1点のみの出土。   |
| ホルンフェルス1  | 49~67    | 風化面が黄色をし、粉を吹いたかのような状態になっているもの。新鮮面は黒に赤紫色がかつてみえる。                   |
| ホルンフェルス2  | 34~48・68 | ホルンフェルス1に当たるまらない、風化の著しい石材を一括した。複数母岩が含まれるが、細分はしていない。               |
| 桑ノ木津留産黒曜石 | 29~32    | 透明度が高く鉛色をする。乳白色のものも、表面の質感などからこれに含めた。                              |
| 安山岩       | 69       | 輝石と思われる黒色鉱物を含む。全体の色調は青灰色。   |
| 砂 岩       | 70~72    | 比較的目粗いもの。   |

**頁岩製石器群** 大半は剥片類（2~28）で構成され、ナイフ形石器（1）が1点のみ含まれる。接合は4例と少なく、剥片剥離の接合（11+12、15+16）、折れ面どうしの接合（9+10、45）、バルバースカーラ片と剥片の接合（6+7）がある。特徴として、縦長剥片（2・3・5・13など）とともに不整形で小形の剥片類（17・18など）も一定量あること、石核がない・碎片の集中も確認されない点がある。剥片剥離は、以下の①②が観察され、縦長剥片の獲得を主目的としている。

①あまり調整の施されない打面、あるいは旧剥離面を打面として、單一方向に縦長剥片を連続して剥離する一群（1・5・13など）。上下方向から剥離された例（9+10）も1例ある。

②高さ3~4cmの板状の石核より寸詰まりの不定形剥片が連続して剥離された一群。

(11+12、15+16、20)

**桑ノ木津留産黒曜石製石器群** 剥片類（29・30）と石核（31）で構成される。原石の小ささもあり、かなり小形の縦長剥片が剥離される。

**赤色頁岩製石器群** 33の1点のみである。石核などはない。

**ホルンフェルス1製石器群** 剥片類・石核で構成される。64は風化が著しいため、細かな加工や詳細な切り合いの把握は困難である。分布はA2区出土の剥片（50・53）・石核（67）を除いて、すべてA1区丘陵付け根あたりの石器ブロック出土である。剥片剥離は、あまり調整の施されない打面、あるいは旧剥離面を打面として、單一方向に縦長剥片が連続して剥離されるものである。また、石器背面に礫面を大きく残す剥片（58・61・63など）も一定量みられる。接合は確認されない。

**ホルンフェルス2製石器群** 振器1点（40）のほか、石核（38・48）と数多くの剥片類で構成される。剥片剥離は、複数母岩を含むものの、さまざまな形態の剥片が剥離される。石核はいずれも厚手の剥片素材で、縁辺より器央に向かって小形の不定形剥片が剥離される。

**石斧・敲石・磨石類** 68は石斧の未製品と判断した。かなり厚手の横に広い剥片を素材とする。剥片周縁に粗い加工を施したのち、刃部と思われる箇所を加工する中で、裏面に大きな抉りが入ってしまい、廃棄されたものであろうか。他石器群と離れて出土した。69~71は敲石、72は磨石である。

## 小 結

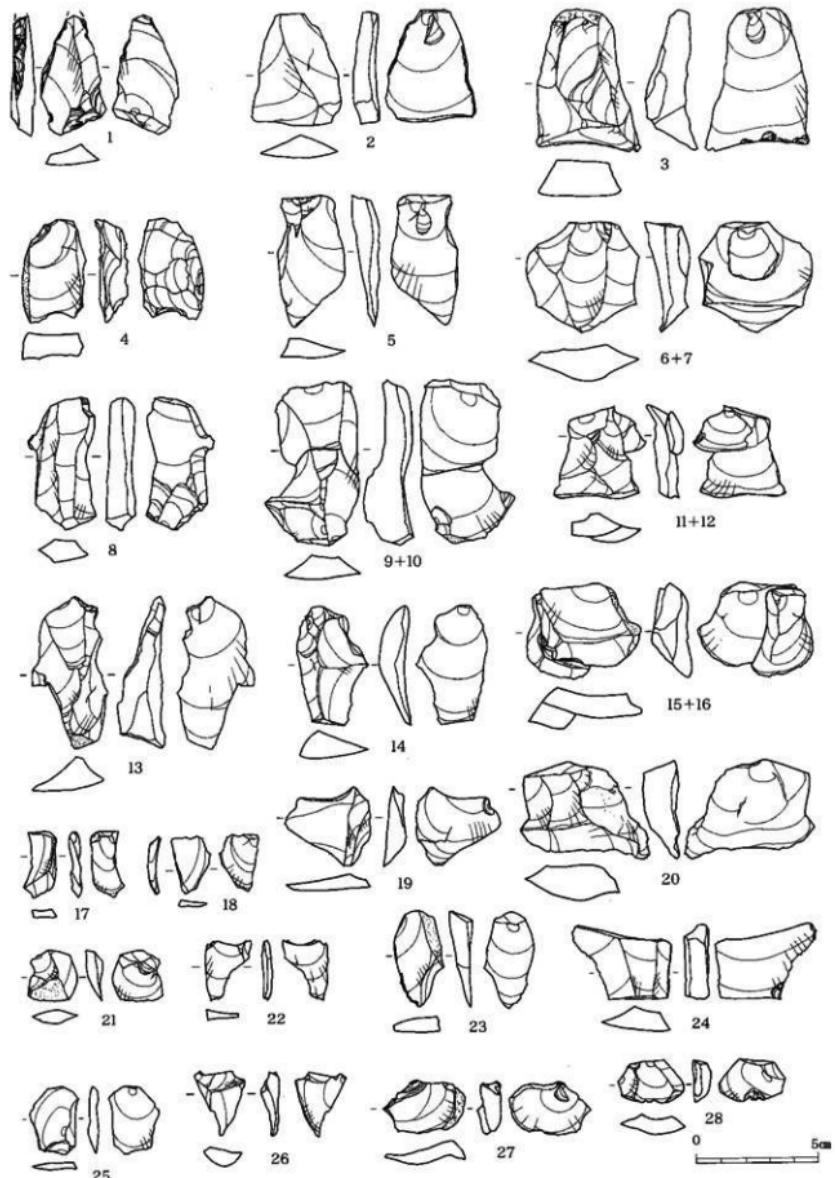
旧石器時代Ⅰ期は、疊群7基と、頁岩製・ホルンフェルス製石器群に特徴付けられる。頁岩・ホルンフェルスはともに眼下の小丸川等で容易に採集可能であり、遺跡内での消費量も多い。少数派である赤色頁岩・桑ノ木津留産黒曜石は、頁岩などにくらべ相対的に遠隔地石材であり、剥片剥離も活発でない。

第6表 旧石器Ⅰ期の石材と人間行動の復元

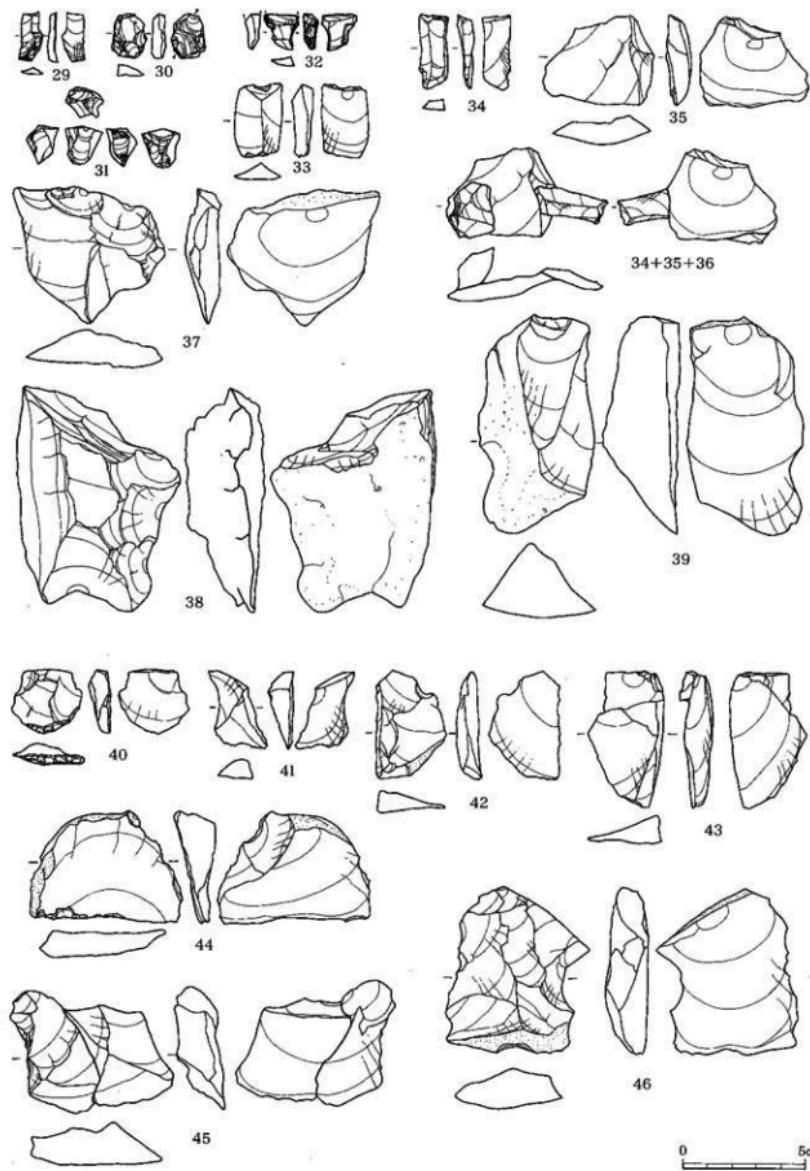
| 石 材       | 接合 | 剥片剥離   | 器種組成   | 行 動   |
|-----------|----|--|--|---|
| 頁 岩       | あり | あまり調整の施されない打面、あるいは旧剥離面を打面として、單一方向に縦長剥片を連続して剥離<br>高さ3~4cmの板状の石核より寸詰まり不定形剥片を連続して剥離 | 礫面を大きく残す剥片は少ない<br>小形の剥片類一定量あり<br>石核ない<br>碎片の集中ない | 剥片剥離のある程度進んだ石核が持ち込まれ、一定程度の剥片剥離が実施されたのち、石核は遺跡外へ持ち出された。     |
| 桑ノ木津留産黒曜石 | なし | かなり小形の縦長剥片を剥離  | 剥片類・石核   | 原石（おそらく原石1点のみ）から持ち込まれ、剥片剥離。                               |
| 赤色頁岩      | 々  | 縦長剥片   | 剥片1点   | 剥片のみ持ち込み。   |
| ホルンフェルス1  | 々  | あまり調整の施されない打面、あるいは旧剥離面を打面として、單一方向に縦長剥片を連続して剥離                                    | 剥片類・石核<br>礫面大きく残す剥片多い<br>石核あり                    | 原石に近い状態で石核が持ち込まれ、遺跡内で頻繁な剥片剥離が実施される。石核は剥離された剥片とともに遺跡に残される。 |
| ホルンフェルス2  | あり | 各種剥片を剥離  | 剥片・石核（複数母岩）                                      | 剥片・石核単独の持ち込みが大半か。遺跡内で頻繁な剥片剥離があつたとは想定しにくい。                 |

第7表 旧石器Ⅰ期遺物観察表（1）

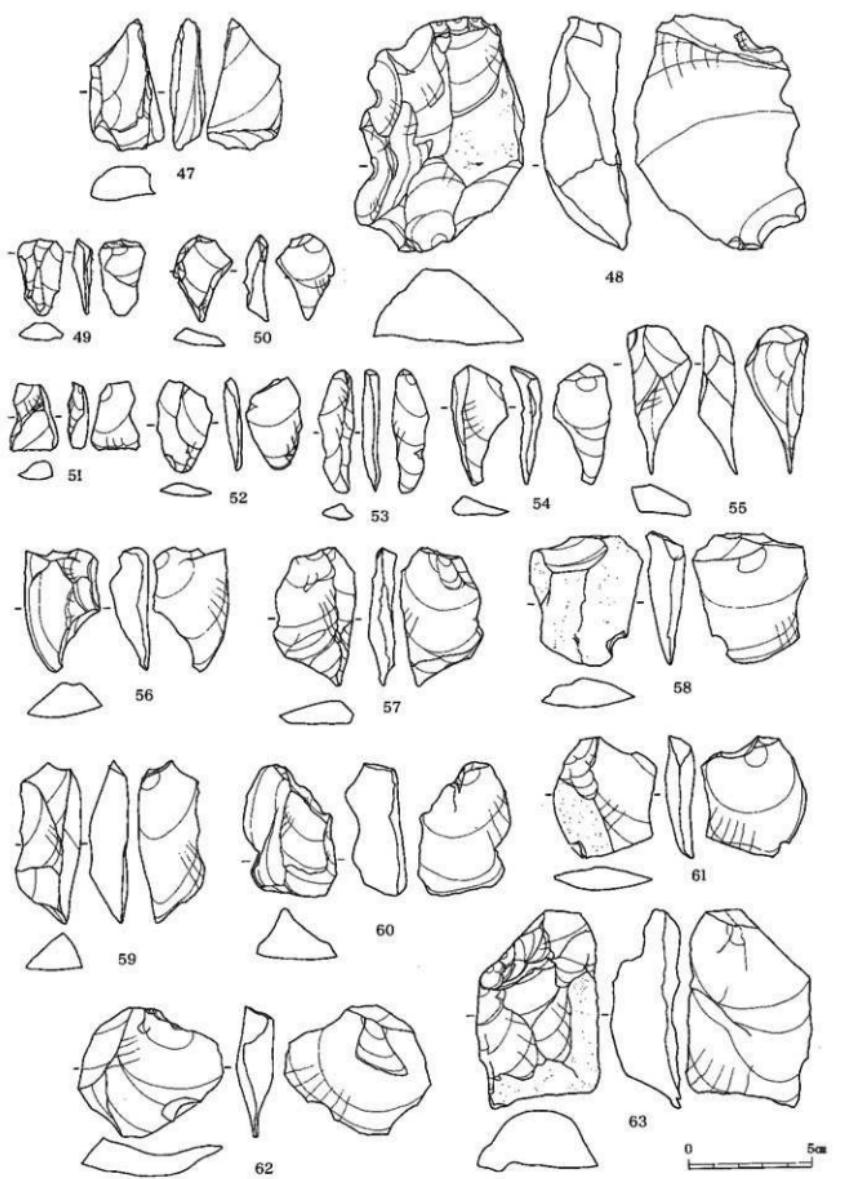
| No     | 出土位置 | 法記       | 高 樹 | 石 材 | 長さ  | 幅   | 厚さ   | 重量  | 備考 | 長さ・幅・厚さ=cm 重量=g |
|--------|------|----------|-----|-----|-----|-----|------|---|----|-----------------|
| 1G333  | 7006 | ナイフ形石器   | Sh  | 5.0 | 2.7 | 1.0 | 11.1 | 遺跡下部で剥離した縦長剥片素材。実材末端をカットするようにプランティングが入る。石器右側面には刃こぼれ様の微細剥離がある。 |    |                 |
| 2G291  | 7053 | 微細剥離ある剥片 | Sh  | 4.7 | 3.7 | 1.1 | 15.7 | 縦長剥片素材。内部斜面に微細剥離がある。  |    |                 |
| 3G401  | 7009 | 微細剥離ある剥片 | Sh  | 5.8 | 4.3 | 2.1 | 39.7 | 作業面上再生などにともなう剥片で、未熟に微細剥離がある。剥片打点面の表面の後は削離する。                  |    |                 |
| 4G281  | 7052 | 剥片       | Sh  | 4.3 | 2.6 | 1.1 | 14.9 | 石核下部に抉り様の加工が入る。   |    |                 |
| 5G272  | 7028 | 剥片       | Sh  | 5.4 | 2.8 | 1.1 | 13.0 | 打面調整なし。   |    |                 |
| 6G292  | 7045 | 剥片       | Sh  | 4.6 | 4.7 | 1.9 | 29.8 | パルブースター剥片と剥片の接合した場所。打面調整なし。                                   |    |                 |
| 7G234  | 7069 | 剥片       | Sh  | 4.6 | 4.7 | 1.9 | 29.8 | パルブースター剥片。6と接合。   |    |                 |
| 8G333  | 7003 | 二次加工ある剥片 | Sh  | 5.5 | 2.8 | 1.2 | 17.9 | 剥片下層表面に數箇の剥離が入る。  |    |                 |
| 9G234  | 7071 | 剥片       | Sh  | 6.8 | 3.9 | 2.1 | 38.7 | 打面に入れ替わながら、上下方向に剥片剥離されたもの。剥片は、渦曲部分で側面的に削離するもの。                |    |                 |
| 10G234 | 7071 | 剥片       | Sh  | 6.8 | 3.9 | 2.1 | 38.7 | 9と接合。   |    |                 |
| 11G223 | 7063 | 剥片       | Sh  | 3.8 | 1.2 | 1.4 | 10.0 | 高さ3~4cmの板状の石核より寸詰まりの縦長剥片を連続して剥離するもの。                          |    |                 |
| 12G281 | 7046 | 剥片       | Sh  | 1.2 | 0.8 | 1.2 | 4.3  | 11と接合。  |    |                 |
| 13G223 | 7061 | 剥片       | Sh  | 6.4 | 3.2 | 1.5 | 21.5 | 作業面上再生剥片か。  |    |                 |
| 14G281 | 701  | 剥片       | Sh  | 4.8 | 3.0 | 1.0 | 14.1 | 旧作業面から剥離方向が90°近く入れ替わった剥片。                                     |    |                 |
| 15G294 | 7041 | 剥片       | Sh  | 4.0 | 4.7 | 1.2 | 19.3 | 16と接合。板状の石核から連続して不定形な縦長剥片を連続して剥離するもの。                         |    |                 |
| 16G294 | 7102 | 剥片       | Sh  | 4.0 | 2.3 | 1.0 | 6.4  | 15と接合。剥離の衝撃で、剥片は二分される。  |    |                 |
| 17G31  | 4029 | 剥片       | Sh  | 2.7 | 1.4 | 0.5 | 1.2  |   |    |                 |
| 18G292 | 7082 | 剥片       | Sh  | 2.4 | 1.6 | 0.5 | 1.3  |   |    |                 |
| 19G223 | 7073 | 剥片       | Sh  | 3.3 | 3.6 | 0.9 | 7.2  | 打面部は失われている。   |    |                 |
| 20G223 | 7072 | 微細剥離ある剥片 | Sh  | 4.1 | 5.4 | 1.5 | 25.4 | 15+16と同一個体であり、同様の剥片剥離がされるもの。                                  |    |                 |
| 21G334 | 7001 | 剥片       | Sh  | 2.1 | 2.1 | 0.7 | 2.7  |   |    |                 |
| 22G234 |      | 剥片       | Sh  | 2.6 | 2.0 | 0.4 | 2.1  |   |    |                 |
| 23G283 | 7051 | 微細剥離ある剥片 | Sh  | 4.0 | 2.0 | 0.1 | 5.2  | 左側面下部に微細剥離がある。  |    |                 |
| 24G292 | 7057 | 微細剥離ある剥片 | Sh  | 3.1 | 4.1 | 1.0 | 12.3 | 右側面に微細剥離がある。  |    |                 |
| 25G282 | 7037 | 剥片       | Sh  | 2.6 | 2.0 | 0.4 | 2.1  |   |    |                 |
| 26G234 | 7067 | 剥片       | Sh  | 2.7 | 2.1 | 0.8 | 2.1  |   |    |                 |
| 27G294 | 7043 | 剥片       | Sh  | 1.8 | 2.7 | 0.8 | 3.1  |   |    |                 |
| 28G161 | 4043 | 剥片       | Sh  | 2.2 | 3.4 | 1.0 | 4.2  |   |    |                 |



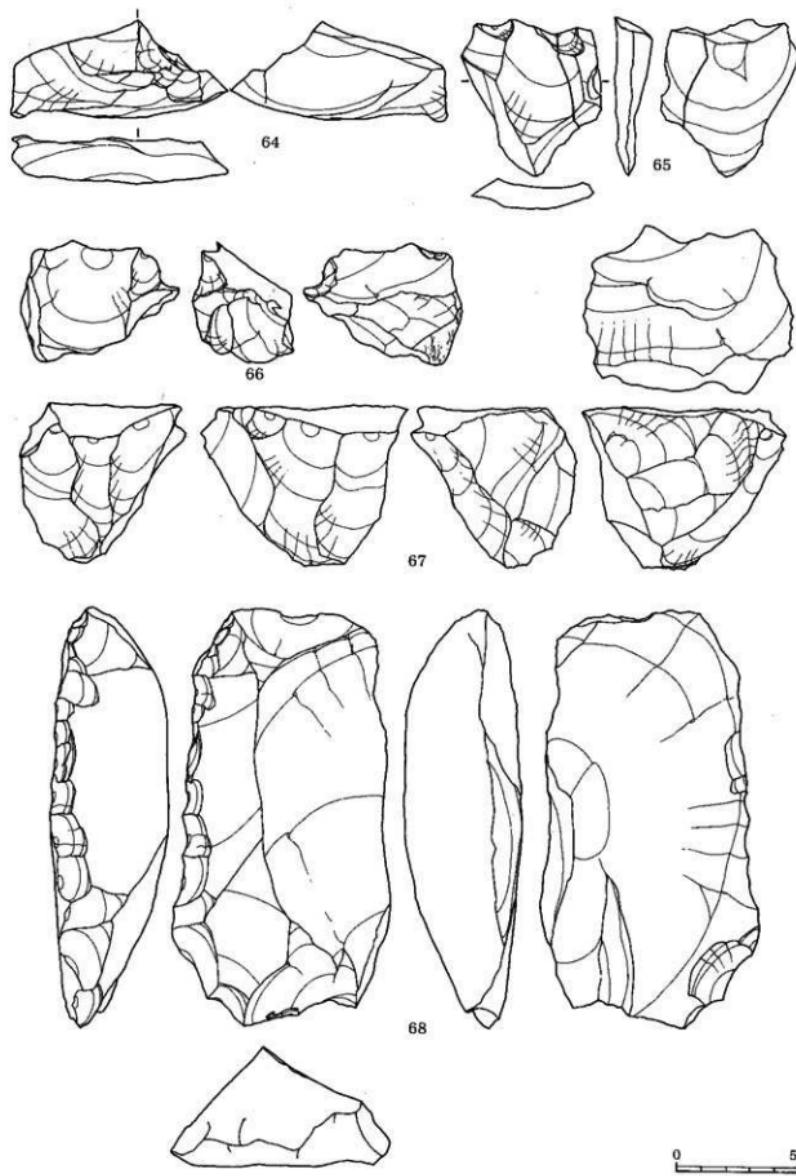
第11図 旧石器Ⅰ期遺物実測図(1)



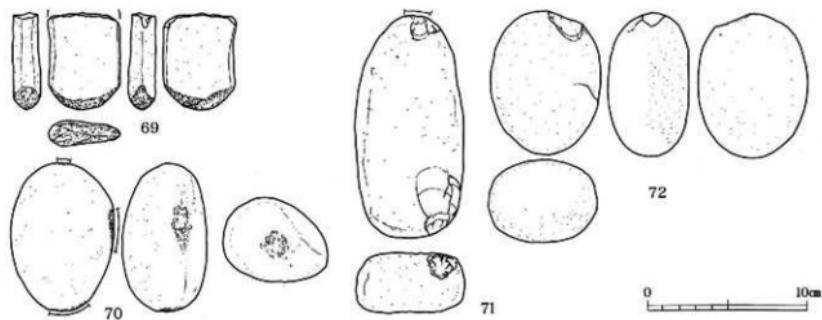
第12図 旧石器Ⅰ期遺物実測図(2)



第13図 旧石器Ⅰ期遺物実測図（3）



第14図 旧石器I期遺物実測図(4)



第15図 旧石器I期遺物実測図(5)

第8表 旧石器I期遺物観察表(2)

| No | 出土位置 | 記号   | 種類         | 石材    | 長さ   | 幅   | 厚さ  | 重さ    | 備考   |
|----|------|------|------------|-------|------|-----|-----|-------|--|
| 29 | G234 | 7065 | 剥片         | 鳥Ob   | 2.1  | 1.0 | 0.4 | 0.5   | 推定鳥/木津留産。小形の綫長剥片。  |
| 30 | G283 | 7034 | 二次加工ある剥片   | 鳥Ob   | 1.8  | 1.5 | 0.6 | 1.5   | 推定鳥/木津留産。石器表面に周縁より細かな加工が入る。                                  |
| 31 | G282 | 7060 | 石核         | 鳥Ob   | 1.6  | 1.6 | 1.3 | 2.2   | 推定鳥/木津留産。打面と作業面を入れ替えて、小形の綫長剥片を剥離する。                          |
| 32 | G283 | 7084 | 二次加工ある剥片   | 鳥Ob   | 1.8  | 1.5 | 0.6 | 1.5   | くすんだ色合があるが鳥/木津留産の可能性がある。肉面縁にやや抉るような加工が入る。                    |
| 33 | G281 | 7025 | 剥片         | 赤ObSh | 3.1  | 2.0 | 0.9 | 5.2   | 綫長剥片。  |
| 34 | G294 | 7042 | 剥片         | H12   | 3.1  | 1.2 | 0.8 | —     | 縁に剥けている。35・36と接合。  |
| 35 | G223 | 6047 | 剥片         | H12   | 3.7  | 4.6 | 1.1 | —     | A T上位色合層から出土。  |
| 36 | G281 | 7058 | 剥片         | H12   | 2.2  | 2.2 | 1.5 | —     | —  |
| 37 | G332 | 7078 | 剥片         | H12   | 5.7  | 6.2 | 1.6 | 41.9  | 撲打面により剥離。  |
| 38 | G84  | 4008 | 石核         | H12   | 9.3  | 6.8 | 3.3 | 176.9 | 裏面は標準。周縁より不定形剥片を中心に向かって剥離。                                   |
| 39 | G31  | 4021 | 剥片         | H12   | 9.0  | 4.9 | 3.2 | 121.7 | 裏面より剥離された綫長剥片。剥離の初期工程のもので、末端に向かって分厚い。                        |
| 40 | G284 | 7029 | 石核         | H12   | 2.7  | 2.9 | 0.9 | 5.6   | 剥片末端に刃部を設定。  |
| 41 | G334 | 7015 | 剥片         | H12   | 3.2  | 4.4 | 1.1 | 4.6   | 縁に剥けている。   |
| 42 | G121 | 4002 | 剥片         | H12   | 4.5  | 2.9 | 1.1 | 11.9  | 剥離の衝撃で裏に剥けている。   |
| 43 | G334 | 7018 | 剥片         | H12   | 5.7  | 7.2 | 1.5 | 18.8  | 剥離の衝撃で裏に剥けている。   |
| 44 | G84  | 4009 | 剥片         | H12   | 4.6  | 6.3 | 1.7 | 38.5  | 撲打面により剥離。  |
| 45 | G332 | 7026 | ・ 剥離剥離ある剥片 | H12   | 5.2  | 6.7 | 2.0 | 49.3  | 剥離の衝撃で裏に剥けた接合剥片。   |
|    | G272 | 7027 | —          | —     | —    | —   | —   | —     | —  |
| 46 | G333 | 7014 | 二次加工ある剥片   | H12   | 6.9  | 5.9 | 1.7 | 68.6  | 撲打面により剥離。  |
| 47 | G342 | 7020 | 二次加工ある剥片   | H12   | 5.4  | 3.1 | 1.4 | 24.7  | 剥離の衝撃により裏に剥けている。   |
| 48 | G283 | 7081 | 石核         | H12   | 9.7  | 7.0 | 3.6 | 217.9 | 手の不均一剥片系。剥片剥離により小形の縁に広い剥片を剥離される。                             |
| 49 | G31  | 4039 | 剥片         | H11   | 3.2  | 1.9 | 0.9 | 4.0   | 裏面下端に盛りあわせられた剥離。   |
| 50 | G292 | 7054 | 剥片         | H11   | 3.6  | 2.5 | 1.1 | 5.2   | 不定形剥片。   |
| 51 | G31  | 4036 | 剥片         | H11   | 2.8  | 2.0 | 0.8 | 3.8   | 剥離の衝撃により裏に剥けている。   |
| 52 | G31  | 4033 | 剥片         | H11   | 3.8  | 2.3 | 0.7 | 4.5   | 打面部は削られていっている。   |
| 53 | G333 | 7012 | 剥片         | H11   | 5.1  | 1.4 | 0.7 | 4.5   | 縁に細く剥けた剥片。   |
| 54 | G31  | 4037 | 剥片         | H11   | 6.0  | 2.3 | 1.3 | 7.2   | —  |
| 55 | G31  | 4035 | 剥片         | H11   | 6.2  | 2.6 | 1.7 | 15.7  | 剥離の衝撃により裏に剥けたため、剥片末端は尖錐になっている。                               |
| 56 | G31  | 4040 | 剥片         | H11   | 5.1  | 3.1 | 1.6 | 21.4  | —  |
| 57 | G31  | 4038 | 剥片         | H11   | 5.7  | 3.4 | 1.1 | 20.5  | —  |
| 58 | G31  | 4026 | 剥片         | H11   | 5.4  | 4.7 | 1.7 | 34.2  | 背面に導面を大きく残す。   |
| 59 | G31  | 4028 | 剥片         | H11   | 6.7  | 2.8 | 1.7 | 25.0  | —  |
| 60 | G31  | 4005 | 剥片         | H11   | 5.6  | 3.9 | 2.5 | 39.5  | —  |
| 61 | G31  | 4032 | 剥片         | H11   | 5.0  | 4.2 | 1.2 | 23.2  | 左側縁の裏面は剥離面の可能性を残すが、風化のためはつきりしない。                             |
| 62 | G33  | 4011 | 剥片         | H11   | 5.3  | 6.0 | 1.6 | 37.9  | —  |
| 63 | G83  | 4027 | 剥片         | H11   | 8.2  | 5.1 | 2.8 | 116.4 | 剥片剥離に先行し、裏面剥落/不要なステップなどを巻く目的の剥片。                             |
| 64 | G83  | 4030 | 剥片         | H11   | 9.0  | 4.1 | 1.9 | 64.2  | 剥片末端は厚くまくれている。   |
| 65 | G342 | 4013 | 剥片         | H11   | 6.5  | 5.8 | 1.5 | 34.9  | —  |
| 66 | G31  | 4034 | 石核         | H11   | 5.0  | 6.5 | 4.2 | 111.1 | 剥離面を打面しながら不定形剥片を剥離したものです。                                    |
| 67 | G332 | 7083 | 石核         | H11   | 6.7  | 6.5 | 6.9 | 381.9 | 風化しため細かな切り欠きが剥離しないものの、最終工程では一打打面により長良剣を通過して剥離する。             |
| 68 | G214 | 7084 | 石核         | H12   | 17.4 | 9.0 | 4.9 | 747.6 | かなり厚い縁の横に広い剥片を素材とする。剥片周縁に粗い加工を施したもの、刃厚と思われる箇所を削りながら剥離してしまった。 |
| 69 | G281 | 7086 | 敲石         | An    | 6.0  | 4.4 | 1.6 | 66.6  | 剥離面を打面しながら剥離しないもの。上下両面に削痕が残る。                                |
| 70 | G31  | 4022 | 敲石         | S     | 9.2  | 6.4 | 5.2 | 393.6 | 剥打面は風化したため剥離しないが積極的に使用感として評価した。                              |
| 71 | G83  | 4042 | 敲石         | S     | 13.8 | 6.6 | 3.8 | 583.0 | 風化のため使用度は明確でない。表面に広く黒色の付着物がある。タールであろうか。                      |
| 72 | G271 | 7103 | 敲石         | S     | 8.9  | 6.9 | 5.1 | 369.5 | —  |

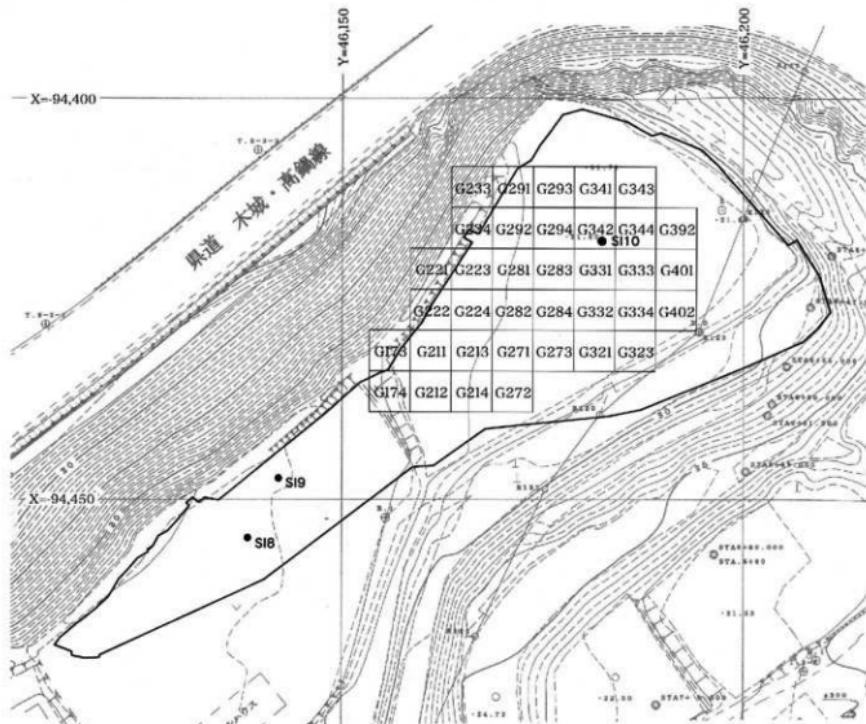
## 2 旧石器時代Ⅱ期

調査面積など 始良Tn火山灰上位の包含層の調査は、IV・V層を対象に、縄文時代包含層や遺構群の調査が終了した箇所から順次着手した。最終的な調査面積は約900m<sup>2</sup>となる。

包含層位 遺物がもっと多く含まれるのはIV層下部からV層中部あたりまでで、礫群の検出面はV層上部であった。これらは時期的に近い一群と考えられ、旧石器時代Ⅱ期とした。

旧地形 旧石器時代Ⅱ期の旧地形は、旧石器時代Ⅰ期のそれに近くおおむね平坦である。

なお、調査経過で触れたように、A1区ではIV・V層を重機で取りのぞき、途中検出された礫群の記録と排土中からの遺物の回収のみをおこなった。また、地点によっては縄文時代以降の炉穴・集石群によって包含層が深く搅拌されており、そういう遺構埋土中からもいくつかの旧石器が回収された。



第16図 旧石器Ⅱ期遺構分布図 (S=1/600)

**碑** A2区のIV層下部で1基のみ礫群が検出された(SI10)。A1区では、調査経過で述べたように旧石器時代II期包含層は重機で除去し、途中V層上部で礫群2基(SI8・9)が検出された。

**礫群** SI8・9は、径0.5~0.6mと小さく、掘り込みはない。礫は砂岩が大半を占め、いずれも顕著に赤化している。炭化物の広がりや礫への付着物は確認されなかった。SI10は、縄文時代の遺構によって部分的に破壊されているものの、1ヶ所の礫の集中箇所とその周辺に散在する礫から構成される。礫の集中箇所は浅い掘り込み様のくぼみとなっている。礫は砂岩・尾鈴山酸性岩類が多くみられ、集中部を中心に顕著に赤化する。

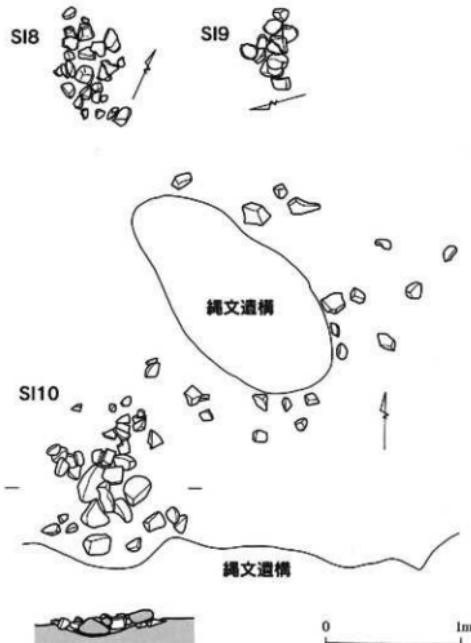
礫群は旧石器時代I期のものと比較して、破碎礫が目立つ。礫群は、縄文時代早期礫との区別困難なものもあったが、密度は本来的に低かったものであろう。

**遺物分布** A2区での石器の分布は、大きく2ヶ所に分かれる。密な接合関係を持つ頁岩1

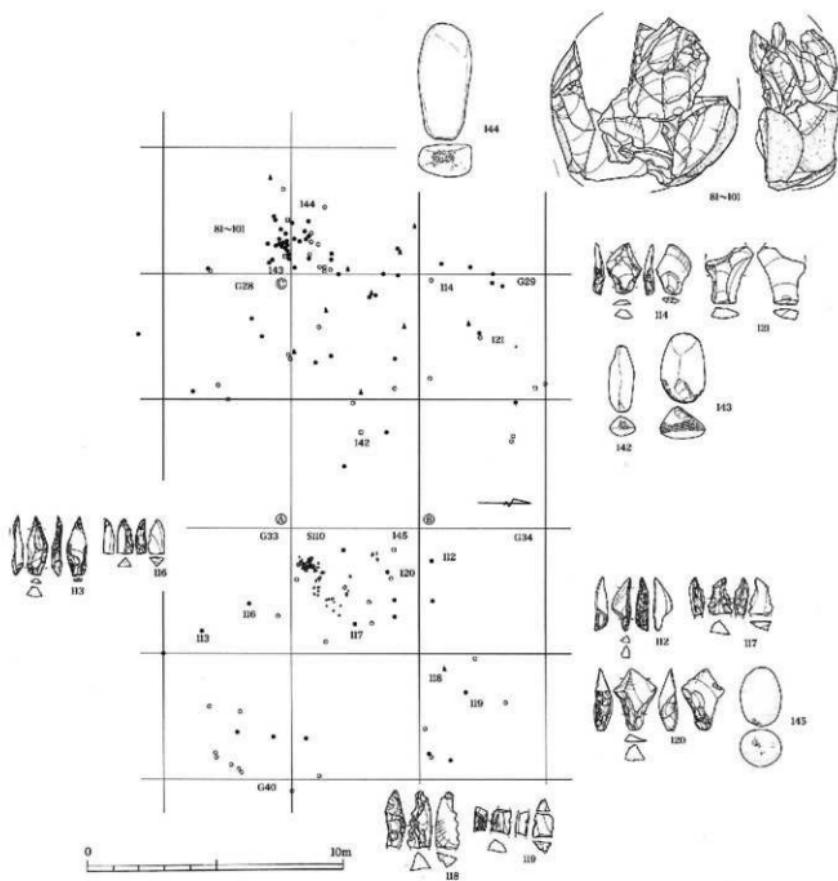
製石器群で構成される石器ブロック1ヶ所、SI10の周辺に散漫に分布する、角錐状石器・ナイフ形石器など製品中心で構成される石器ブロック1ヶ所である。

第9表 旧石器II期石器石材分類

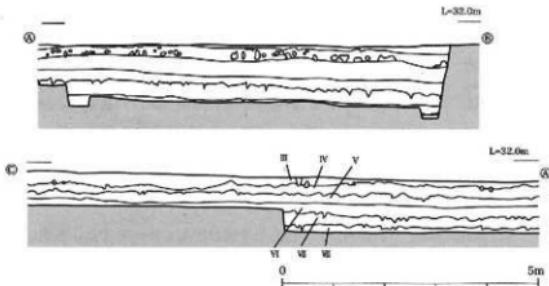
| 石 材      |         | 特 徵 (分類基準)  |
|----------|---------|---|
| 頁岩 1     | 73~101  | 風化面が暗い青灰色であり、部分的に赤紫色の斑の入るもの。<br>岩石学的にはホルンフェルスに相当しそうであるが、風化の異常を優先させ頁岩と呼びたい。<br>複数母岩あると思われるが、単独個体が多い。 |
| 頁岩 2     | 104ほか   | 風化面が暗い青灰色であるものの、頁岩1でなく、かつ風化面にツヤのあるものを一括した。<br>複数母岩あると思われるが、単独個体が多い。                                 |
| 流紋岩 1    | 115ほか   | 風化面が淡い黄白色をし、かつややざらつくもの。   |
| 流紋岩 2    | 152ほか   | 風化面が淡い黄白色をし、かつ白色の斑のはいるもの。流紋岩1に比べややツヤがある。  |
| 流紋岩 3    | 118ほか   | 風化面が淡い灰色~灰黄白色をし、かつツヤのあるもの。  |
| ホンフェルス 2 | 106ほか   | 旧石器時代I期と同じく、ホルンフェルス1に当てはまらない、風化の著しい石材を一括した。<br>複数母岩が含まれるが、細分はしていない。                                 |
| 日東産黒曜石   | 147     | 黒色で透明度が低い。白色の斑晶を多く含む。   |
| 島ノ津産黒曜石  | 162~163 | 黒色で透明度が高く鉛色をする。表面の質感などからこれに含めた。   |
| 尾鈴山酸性岩類  | 141     | いわゆる尾鈴山酸性岩類。  |
| 砂 岩      | 142~145 | 比較的目の粗いもの。  |



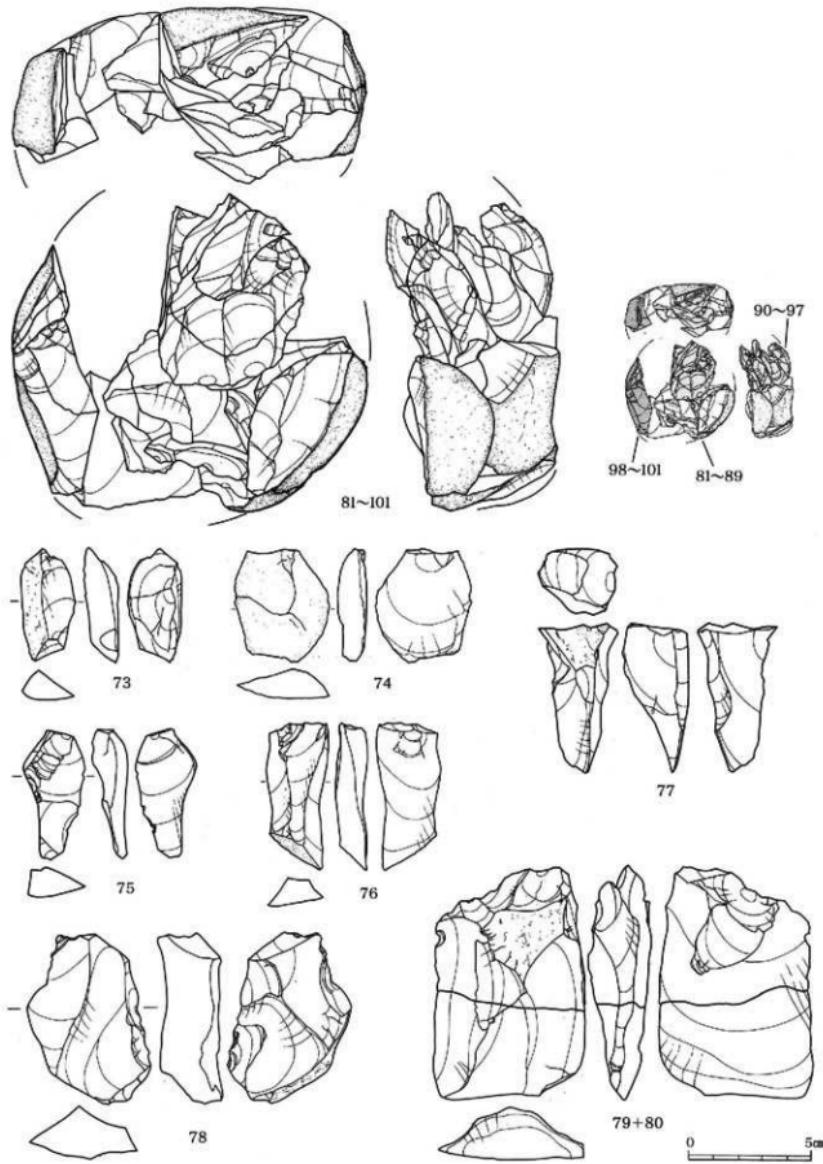
第17図 旧石器II期礫群実測図



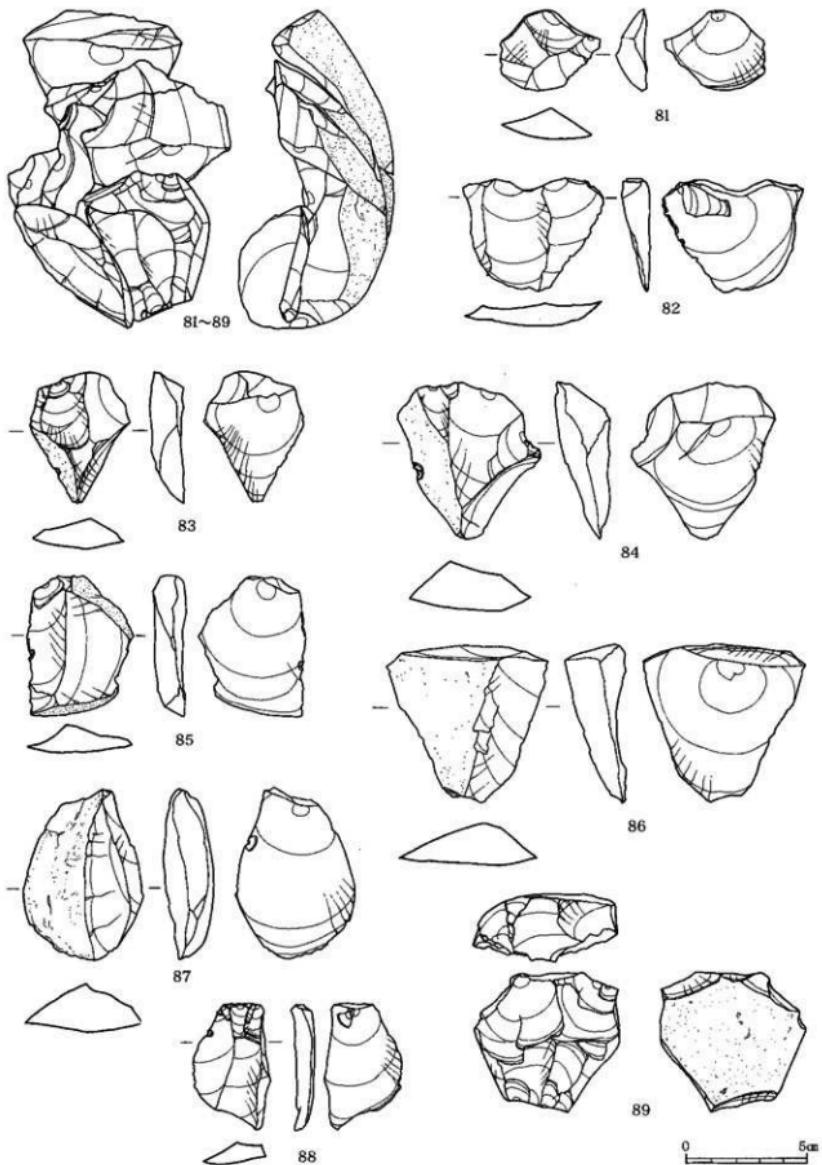
●頁岩  
○ホルンフェルス  
▲流紋岩  
□砂岩



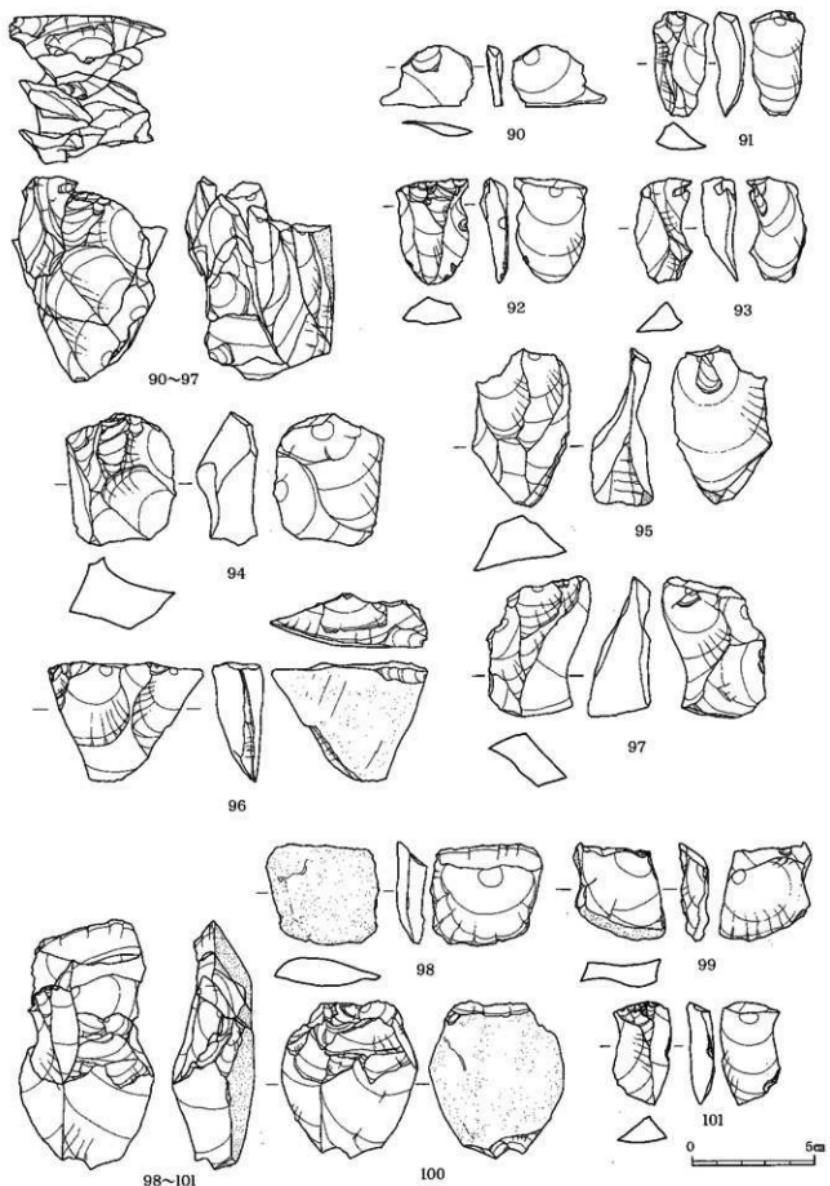
第18図 旧石器Ⅱ期遺物分布図・土層断面図



第19図 旧石器II期遺物実測図(1)



第20図 旧石器II期遺物実測図 (2)



第21図 旧石器Ⅱ期遺物実測図（3）

### 頁岩1製石器群 (73~101)

73~80は頁岩1で接合が確認されなかった剥片・石核である。後述の81~101の特徴から、73・74は礫面除去・打面作出に関わり、76は目的剥片である可能性が高い。79+80は打面あるいは作業面作出に伴う剥片の可能性が高い。

81~101は長径16cm、短径15cm、厚み7cm以上の橢円礫を母材に剥片剥離された接合資料である。礫の大分割の後、81~89、90~97、98~101に再分割され、それぞれで剥片剥離が実施される。目的剥片は長さ4~5cmの縦長剥片であり、これに伴ってイレギュラーに剥離されたと推定される不整形な剥片も一定量みられる。

81~89は、81~86はかで礫面除去・打面作出が実施される。剥離された剥片の形状は、両側縁に大きな張り出しを残すなど、目的剥片に比べやや不整形である。打面形成後、87で礫面周辺を打ち落とし、ついに88など目的剥片が剥離される。

90~97は、打面調整に伴う剥片類が確認されない。91~95・97は目的剥片剥離であり、2回以上の打面再生を繰り返しながら、剥片剥離される。打面調整は顕著でなく、打面のゆがみを数発の剥離で

第10表 旧石器II期頁岩1の工程

| 道 路              | 工 程          | 内 容                          |                   |        |
|------------------|--------------|------------------------------|-------------------|--------|
| 野首1<br>あるいは別道跡 ↓ | 1 母材となる礫の大分割 | 90(分割に伴う剥片?)                 |                   |        |
| 野首1<br>↓         | 2 大分割礫の再分割   | 81~89                        | 90~97             | 98~101 |
|                  | 3 磨面除去・打面作出  | 86→81→85→86→83→82→84         |                   | 98~99  |
|                  | 4 目的剥片の剥離    | 87→88                        | 93→94→97→92→91→95 | 101    |
|                  | 5 残 残        | 89                           | 96                | 100    |
| 別道跡              | 6 残りの大分割礫の行方 | 工程1が野首1で実施されたならば、野首1から別道跡へ搬出 |                   |        |

第11表 旧石器II期遺物観察表(1)

| No       | 出土位置 | 記述       | 種 種 | 石 材 | 長 広 | 幅   | 厚 底   | 底 面  | 備 考 |
|----------|------|----------|-----|-----|-----|-----|-------|--|-----|
| 73 G223  | 6024 | 剥片       | Sh1 | 4.7 | 2.3 | 1.5 | 14.7  | 礫面による厚手の剥片、早い工程での剥片であろう  |     |
| 74 G223  | 6052 | 剥片       | Sh1 | 4.7 | 4.0 | 1.2 | 23.2  | 礫面除去に伴う剥片  |     |
| 75 G223  | 6058 | 剥片       | Sh1 | 5.4 | 2.5 | 1.5 | 14.4  | 打面後90°入れ替えた直後の剥片であろう   |     |
| 76 G294  | 6155 | 剥片       | Sh1 | 6.1 | 2.6 | 1.3 | 19.7  | 通常して剥離された縦長剥片、旧剥離面を打面とする。末端には縦溝  |     |
| 77 G223  | 6120 | 石核       | Sh1 | 6.2 | 3.3 | 2.7 | 39.6  | 四角柱状の石核  |     |
| 78 G17付近 | 6210 | 石核       | Sh1 | 7.1 | 5.1 | 2.7 | 77.9  | 厚手で重んだ剥片剥離から中~小形の横長に近い剥片が剥離される。剥離された剥片は小さくと接合。大形・厚手の剥片であり、剥片(79+80)剥離に伴って割れた可能性が高い |     |
| 79 G223  | 6040 | 剥片       | Sh1 | 9.6 | 6.2 | 2.6 | 149.7 | 80と接合。80と接合。大形・厚手の剥片であり、剥片(79+80)剥離に伴って割れた可能性が高い                                   |     |
| 80 G223  | 6122 | 剥片       | Sh1 | 9.6 | 6.2 | 2.5 | 149.7 | 80と接合  |     |
| 81 G292  | 6143 | 剥片       | Sh1 | 3.4 | 4.2 | 1.3 | 12.5  | 礫面の除去等に伴う剥片  |     |
| 82 G223  | 6036 | 剥片       | Sh1 | 4.6 | 5.9 | 1.1 | 23.5  | 礫面の除去等に伴う剥片  |     |
| 83 G223  | 6027 | 剥片       | Sh1 | 4.6 | 4.2 | 1.4 | 24.9  | 礫面の除去等に伴う剥片  |     |
| 84 G29付近 | 6027 | 剥片       | Sh1 | 4.6 | 5.9 | 2.3 | 66.1  | 礫面の除去等に伴う剥片  |     |
| 85 G29付近 | 6037 | 剥片       | Sh1 | 4.6 | 4.4 | 1.5 | 30.7  | 礫面の除去等に伴う剥片  |     |
| 86 G223  | 6069 | 剥片       | Sh1 | 4.6 | 6.7 | 2.5 | 79.4  | 礫面の除去等に伴う剥片  |     |
| 87 G223  | 6035 | 剥片       | Sh1 | 4.6 | 5.0 | 2.1 | 65.4  | 目的剥片、石核89の上方面より剥離される   |     |
| 88 G223  | 6033 | 剥片       | Sh1 | 4.6 | 3.2 | 0.9 | 14.0  | 目的剥片、石核89の下方面より剥離される   |     |
| 89 G223  | 6121 | 石核       | Sh1 | 4.6 | 6.0 | 2.8 | 114.2 | 81~86で礫面が除去され87~88は目的剥片の剥離が進んだ結果の石核、裏面は縦溝、鷹平な六角柱状の石核                               |     |
| 90 G224  | 6044 | 剥片       | Sh1 | 4.6 | 3.9 | 0.8 | 3.6   | 確分割に伴うバーバースカーフ剥片   |     |
| 91 G234  | 6043 | 剥片       | Sh1 | 4.6 | 2.2 | 1.3 | 10.3  | 目的剥片   |     |
| 92 G292  | 6154 | 剥片       | Sh1 | 4.6 | 2.9 | 1.1 | 13.5  | 目的剥片   |     |
| 93 G234  | 6057 | 剥片       | Sh1 | 4.6 | 2.4 | 1.4 | 8.4   | 目的剥片、明らかにイレギュラー  |     |
| 94 G223  | 6033 | 剥片       | Sh1 | 4.6 | 4.6 | 2.5 | 52.3  | 目的剥片に伴う剥片、裏面せず歪になつたものか   |     |
| 95 G223  | 6026 | 剥片       | Sh1 | 4.6 | 4.1 | 2.6 | 40.2  | 目的剥片剥離に伴う剥片、裏面せず歪になつたものか   |     |
| 96 G223  | 6034 | 石核       | Sh1 | 4.6 | 6.4 | 2.1 | 60.8  | 90~95:97はか剥片剥離後の横模、裏面は縦溝で、扁平な横模  |     |
| 97 G28付近 | 6212 | 剥片       | Sh1 | 4.6 | 4.3 | 2.7 | 39.7  | 目的剥片剥離に伴う剥片、裏面せず歪になつたものか   |     |
| 98 G294  | 6015 | 剥片       | Sh1 | 4.6 | 4.6 | 1.1 | 24.6  | 分割剥離を打面とする。礫面除去・打面作出に伴う剥片  |     |
| 99 G223  | 6045 | 剥片       | Sh1 | 4.6 | 3.8 | 1.2 | 16.0  | 分割剥離を打面とする。礫面除去・打面作出に伴う剥片  |     |
| 100 G223 | 6030 | 石核       | Sh1 | 4.6 | 5.6 | 3.3 | 91.4  | 98~99~101に伴う横模、裏面は縦模を残し鷹平  |     |
| 101 G234 | 6055 | 微細剥離ある剥片 | Sh1 | 4.6 | 1.9 | 1.1 | 10.3  | 目的剥片   |     |

修整する程度である。目的剥片は1~2枚を除いてすべて接合することから、その1~2枚が首尾良く獲得できた目的剥片の可能性がある。目的剥片剥離は、最終的に石核(96)の厚みが2cmになるまで進行する。

98~101は、98・99ほかで礫面を除きつつ打面を作出し、その打面より101など縦長剥片を剥離する。数枚の剥離の後、ついには著しいヒンジフラクチャーのため剥片剥離の継続が困難となり、廃棄される(100)。

#### 流紋岩製石器群(102・103・114・115・117~120)

流紋岩製石器は、流紋岩1(102・114・115・120)、流紋岩2(103)、流紋岩3(117~119)に分かれる。流紋岩1にはナイフ形石器・台形様石器があり、流紋岩3には角錐状石器があり、ともに剥片・石核はみられない。これに対し、流紋岩2には剥片類・石核があり、製品はみられない。流紋岩1の剥片剥離は、石器剥離面の観察から、石核外縁より斜めに剥離軸をもつ剥片を、求心状に連続して剥離するものである。各石器の素材剥片末端側には、石核の分割面と思われるボジ面に近い大きな剥離面が残る。ナイフ形石器・台形様石器とともに、剥片の末端形状を活かしたものとなっている。流紋岩2は角錐状石器であり、同石器には頁岩製のもの(116)も1点みられ、いずれも横長剥片素材となる。また、角錐状石器はすべて欠損している。

#### 他石材製石器群

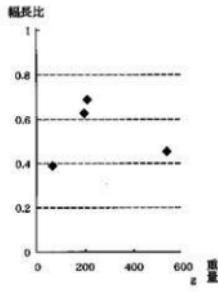
頁岩2・ホルンフェルス2には様々な形状の剥片がみられ、これに対し石核は138・140と少ない。頁岩2(この頁岩2はほかの頁岩に比べ頁岩1に近い)製のナイフ形石器(112・113)がある。

チャート製石器は122の二次加工ある剥片が1点ある。剥離技術や同一石材の多くが縄文時代包含層中にあることから、縄文時代以降の所産である可能性を残す。

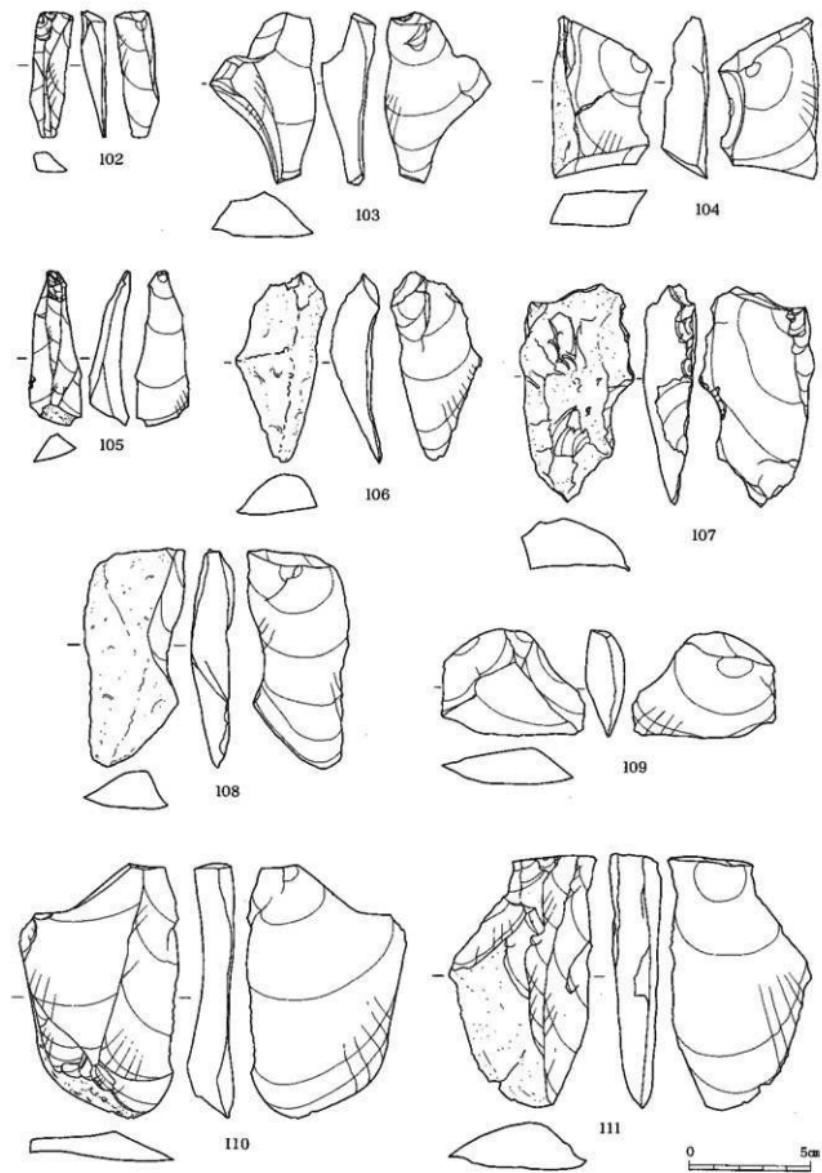
敲石は、重量と長幅比から3群に分けられる(第23図)。

なお、A1区については、耕土中より遺物の回収を実施し、ナイフ形石器・角錐状石器・二次加工ある剥片(146~149)を得た。剥片・碎片・石核類はほとんど確認されなかつたため、A1区は石器製作空間ではなく、製品を中心とした石器が少量分布する状況であったと推測される。

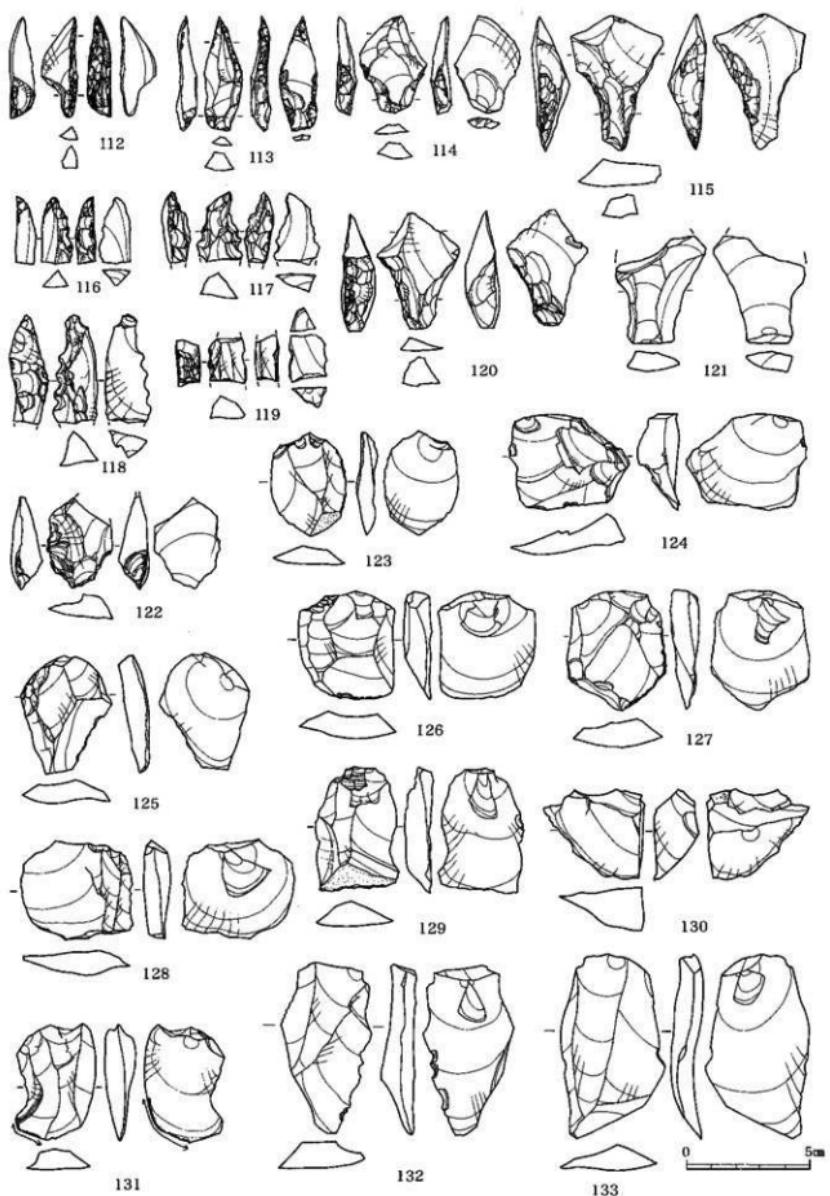
ここまでに図示したほか、縄文時代以降の遺構埋土中出土や表面採集の旧石器がある(150~163)。153・155は流紋岩2であり、近接して出土している。156・160は砂岩製石器である。旧石器包含層中からは砂岩製石器は未確認であるものの、単一方向に連続して剥離された縦長剥片であること、縄文時代石器群中に同一母岩の砂岩製石器群のみられないことから、旧石器と判断した。162・163は散礫1の礫と混在していたもので、縄文早期の所産の可能性を残す。いずれも桑ノ木津留産黒曜石を素材とし、先端を尖鋭にする意識が認められ、刺突具の一種であろう。



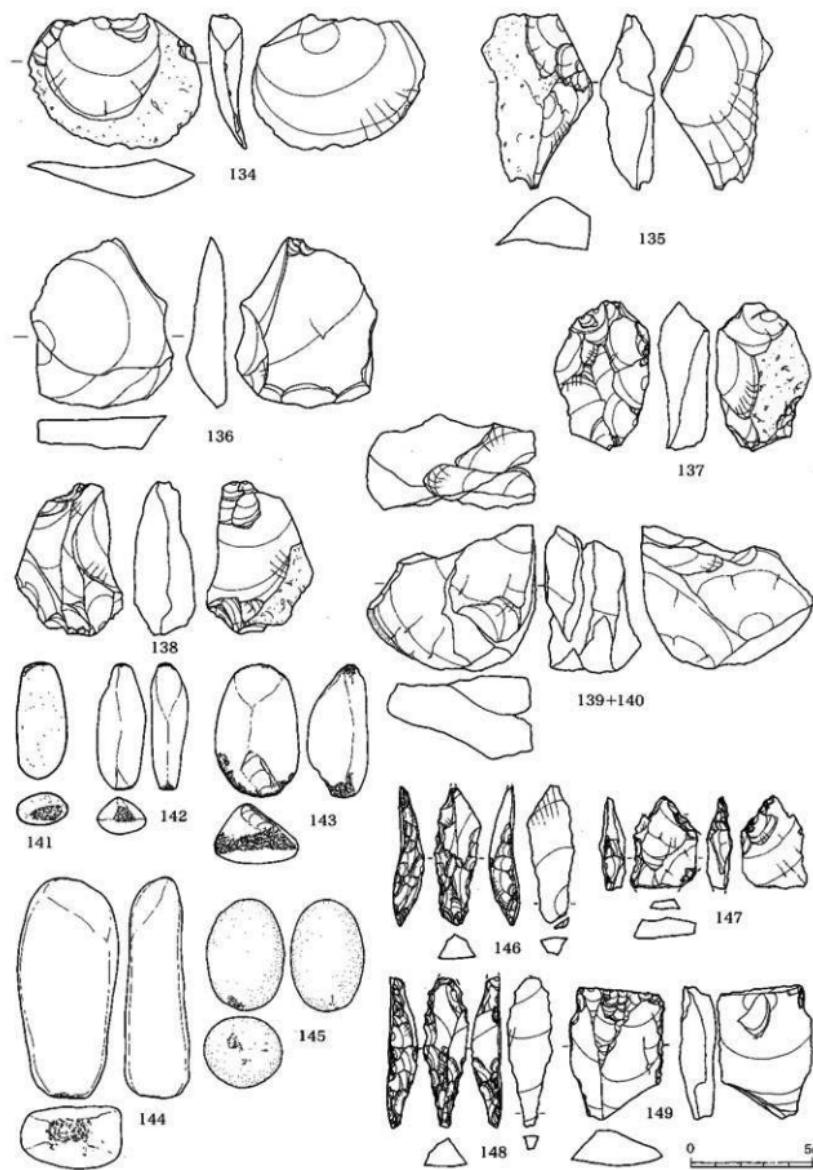
第22図 旧石器Ⅱ期  
敲石の長幅比



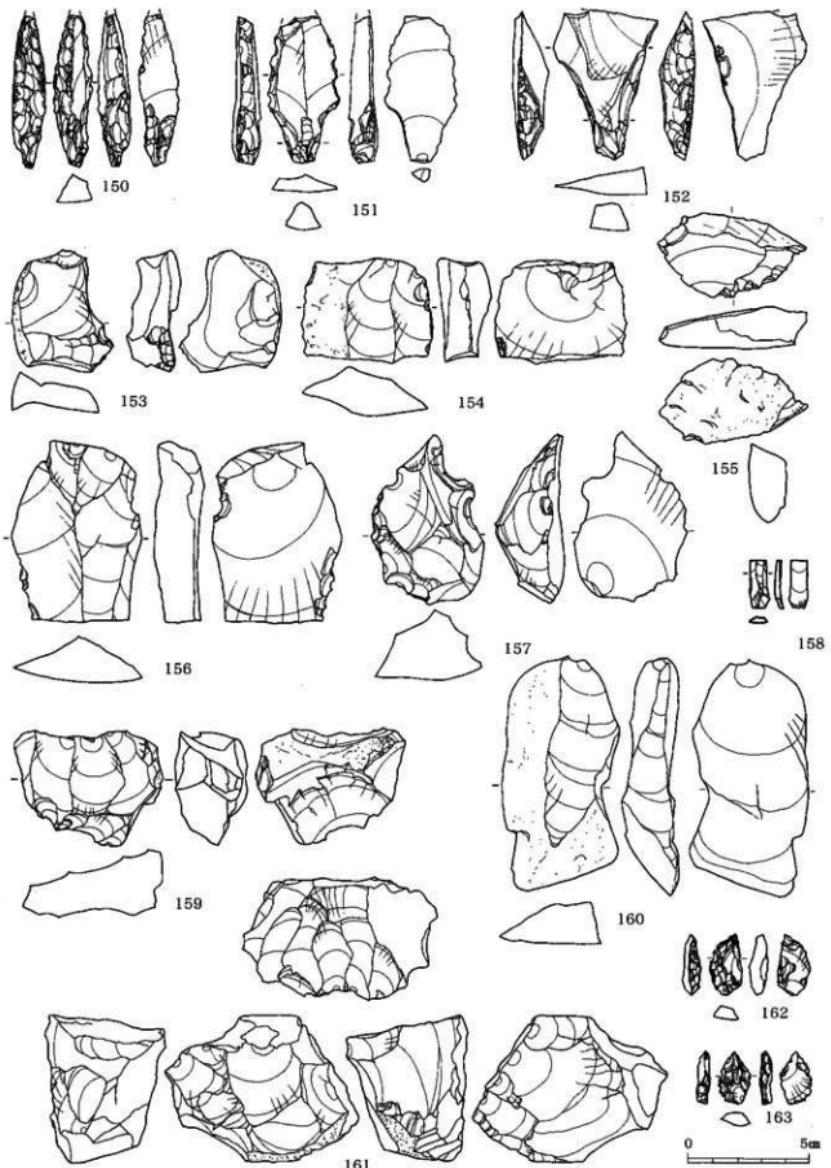
第23図 旧石器II期遺物実測図 (4)



第24図 旧石器II期遺物実測図(5)



第25図 旧石器II期遺物実測図 (6)



第26図 包含層外出土旧石器実測図

第12表 旧石器II期遺物観察表(2)

| 地質土壤   | 記号        | 番号       | 石材   | 大きさ | 幅   | 厚さ                   | 重量   | 備考 |
|--|-----------|----------|------|-----|-----|----------------------|--|----|
| 102 G17 6102                                 | 剥片        | Rh       | 5.3  | 1.8 | 1.0 | 7.7                  |  |    |
| 103 G291 6146                                | 剥片        | Rh       | 7.1  | 4.3 | 2.2 | 35.0                 |  |    |
| 104 G291 6151                                | 剥片        | Sh       | 6.8  | 4.2 | 1.9 | 56.6                 |  |    |
| 105 G31 6200                                 | 剥片        | Sh       | 6.4  | 2.1 | 1.7 | 12.7                 |  |    |
| 106 G333 6085                                | 剥片        | Hl       | 7.8  | 3.7 | 2.0 | 37.7                 |  |    |
| 107 G342 6112                                | 剥片        | Sh       | 9.0  | 4.7 | 2.2 | 87.5                 |  |    |
| 108 G291 6014                                | 剥片        | Sh       | 9.1  | 4.2 | 1.7 | 63.1                 |  |    |
| 109 G234 6053                                | 剥片        | Hl       | 4.4  | 6.0 | 1.6 | 39.6                 |  |    |
| 110 G343 6103                                | 剥片        | Sh       | 10.6 | 6.6 | 1.9 | 116.8                |  |    |
| 111 G291 6131                                | 剥片        | Sh       | 10.4 | 6.0 | 2.2 | 123.9                |  |    |
| 112 G341 6110                                | ナイフ形石器    | Sh       | 4.2  | 1.5 | 1.0 | 4.4                  | 不定形剥片素材。基部は済みがあり、鋸面に加工が施される。プランティングは上下両方向から施される。                               |    |
| 113 G331 6007                                | ナイフ形石器    | Sh       | 4.6  | 1.6 | 0.8 | 4.7                  | おもむね上下両方向より削離された鋸面剥片素材。素面打面を基部とし、右前面を中心に入念な加工が施される。石器表面には、先端・基部とともに平滑な面が形成される。 |    |
| 114 G291 6141                                | ナイフ形石器    | Hl       | 4.1  | 2.8 | 0.7 | 6.1                  | 旧剥離面を打面にする不定形剥片素材。石器底部はやや有意味に作成される。  |    |
| 115 G17 6102 点                               | 台形石器      | Rh       | 5.7  | 3.8 | 1.6 | 20.2                 | 右面先端は素面剥片形状を残す。  |    |
| 116 G331 6006                                | 角錐状石器     | Sh       | 2.8  | 1.3 | 0.9 | 2.7                  | 求心状に削離された不規則剥片素材。石器表面にはボジ面が必ずかに現れる。基部は裏面側から縦面に作成される。石器裏面には、素面剥片の打面痕を除く平滑削離がある。 |    |
| 117 G342 6003                                | 角錐状石器     | Sh       | 2.9  | 1.9 | 1.1 | 4.5                  | 模様の不定形剥片素材。先端が基部とは明確でない。加工は浅く、表面状態になる。   |    |
| 118 G343 6107                                | 角錐状石器     | Rh       | 4.5  | 2.0 | 1.6 | 9.9                  | 模様の不定形剥片素材。加工は粗く、とくに左側面は基部状である。先端は使用にともならぬとみられる削離がある。                          |    |
| 119 G343 6105                                | 角錐状石器     | Sh       | 1.9  | 1.5 | 1.0 | 3.5                  | 模様の不定形剥片素材。先端・基部ともに欠損。左側面は低い緩面状。   |    |
| 120 G342 6001                                | 台形様石器     | Hl       | 4.8  | 3.4 | 1.3 | 12.6                 | 求心状に削離された不定形剥片素材。形態は115に類似する。  |    |
| 121 G291 6129                                | 剥片尖頭器     | Sh       | 4.4  | 3.7 | 0.8 | 12.8                 | 丸みを帯び、加えて状況は需要でないものの、形態から剥片尖頭器と判断した。先端は大きく欠損する。                                |    |
| 122 G233 6028                                | ナイフ形剥片    | Ch       | 3.8  | 2.7 | 1.3 | 10.0                 | 不定形剥片素材。講文時代の所産の可能性を残す。  |    |
| 123 G342 6004                                | 骨錐形剥片     | Sh       | 4.3  | 3.0 | 0.9 | 9.6                  | 繊細な削離された打面より削離される。骨錐形剥片は左側面にある。  |    |
| 124 G233 6070                                | 骨錐形剥片ある剥片 | Sh       | 4.0  | 5.0 | 1.7 | 23.3                 | 右側面ある打面より削離される。骨錐形剥片は右側面にある。   |    |
| 125 G341 6109                                | 骨錐形剥片ある剥片 | Sh       | 4.9  | 3.8 | 1.2 | 15.8                 | 右側面ある打面より削離される。骨錐形剥片は右側面にある。   |    |
| 126 G17 6204                                 | 骨錐形剥片ある剥片 | Sh       | 6.4  | 4.0 | 1.2 | 19.2                 | 旧剥離面を打面とする不定形剥片素材。後剥離面は剥片末梢にある。  |    |
| 127 G281 6077                                | 骨錐形剥片ある剥片 | Sh       | 4.9  | 4.1 | 1.2 | 23.9                 | 旧剥離面を打面とする不定形剥片素材。後剥離面は剥片末梢にある。  |    |
| 128 G17 6202                                 | 骨錐形剥片ある剥片 | Sh       | 4.1  | 4.6 | 1.1 | 21.2                 | おそらく、旧剥離面を打面にする不定形剥片素材。右側面剥片は右側面にある。   |    |
| 129 G282 6084                                | 骨錐形剥片ある剥片 | Sh       | 5.2  | 3.4 | 1.2 | 21.6                 | 末梢に骨錐形剥片素材。骨錐形剥片は木板にあるもの、剥離面にともならず裏面で生じた可能性が高い。                                |    |
| 130 G281 6083                                | 剥片        | Sh       | 3.8  | 4.3 | 1.8 | 22.1                 | 旧剥離面を打面とする。  |    |
| 131 G294 6009                                | 骨錐形剥片ある剥片 | Sh       | 4.9  | 3.3 | 1.2 | 19.0                 | 牌型剥片ある打面より削離される。骨錐形剥片は剥片末梢にある。   |    |
| 132 G17 6207                                 | 剥片        | Sh       | 7.1  | 3.7 | 1.4 | 30.3                 | 右側面に小さな剝離が確認できる。打面剥片はない。   |    |
| 133 G333 6097                                | 剥片        | Hl       | 7.7  | 4.4 | 1.3 | 33.9                 | 打面剥片はない。   |    |
| 134 G17 6211                                 | 剥片        | Sh       | 5.6  | 7.2 | 1.5 | 44.9                 | 打面剥片はない。バーリクの先端が残している。   |    |
| 135 G291 6132                                | 剥片        | Sh       | 7.3  | 4.6 | 2.2 | 47.3                 | 右側面に骨錐形剥片があるものか、非常に不定形な剥片となっている。打面剥片はない。                                       |    |
| 136 G343 6104                                | 剥片        | Hl       | 7.1  | 5.9 | 1.7 | 71.2                 | 裏面が高く、削離方向が切り合いかが確認できない。   |    |
| 137 G234 6067                                | 石核        | Rh       | 6.1  | 3.9 | 2.0 | 41.5                 | おそらく、右側面の剥片素材。周縁より内に向かって小ぶりの不定形剥片が削離される。                                       |    |
| 138 G223 6025                                | 石核        | Sh       | 6.3  | 4.4 | 2.5 | 61.5                 | 厚手の不定形剥片素材。小形の剥片が削離されるもの、目的剥片であったかは不明。   |    |
| 139 G281 6072                                | 剥片        | Hl       | 4.9  | 3.5 | 1.5 | 40.0                 | 140と雷同。  |    |
| 140 G281 6071                                | 石核        | Hl       | 5.5  | 7.0 | 3.7 | 130.1                | 旧剥離面を打面し、厚手の不定形剥片(138)が剥離される。  |    |
| 141 G234 7108                                | 駆石        | 兔足       | 7.3  | 3.1 | 2.0 | 64.0                 | 剥離部は部分的に生存する。上端に底をなすほど垂直な駆打痕がある。下端の駆打痕は剥離でない。                                  |    |
| 142 G294 6010                                | 駆石        | S        | 7.9  | 3.1 | 2.3 | 67.2                 | 上下両端に駆打痕あり。上端ともに面をなすほど垂直な駆打痕。  |    |
| 143 G223 6037                                | 駆石        | S        | 8.3  | 5.2 | 3.8 | 194.1                | 上下両端に駆打痕あり。上端は深く、下端は裏面である。   |    |
| 144 G223 6031                                | 駆石        | S        | 13.8 | 6.3 | 4.0 | 539.9                | 下端のみ、裏面に駆打痕が認められる。   |    |
| 145 G342 6111                                | 駆石        | S        | 7.0  | 4.8 | 4.5 | 209.8                | 不定形剥片素材で、剥片裏面より加工が施される。  |    |
| 146 A2区 AT上                                  | ナイフ形石器    | Hl       | 5.7  | 2.0 | 1.3 | 8.5                  | 底面は完全に剥離され難い。不定形剥片素材。  |    |
| 147 A2区 AT上H                                 | ナイフ形石器    | #006 3.7 | 2.8  | 1.0 | 9.0 | 基部は完全に剥離される。先端を欠損する。 |  |    |
| 148 A2区 12                                   | 角錐状石器     | Rh       | 6.2  | 1.8 | 1.1 | 10.2                 | 單斜打面より剥離された成長剥片素材。円錐面に強かな剝離が確認される。   |    |
| 149 A2区 AT上H                                 | 剥片        | Rh       | 5.5  | 3.9 | 1.5 | 33.9                 | 厚手の剥片素材。裏面の剥離は基部のみ。先端を欠損する。  |    |
| 150 A1区 SC274                                | 角錐状石器     | Sh       | 6.3  | 1.6 | 1.3 |                      |  |    |
| 埋土中  |           |          |      |     |     |                      |  |    |
| 151 A1区 T1                                   | 剥片尖頭器     | Hl       | 5.0  | 3.0 | 1.2 | 18.0                 | 左側面は剥離により齊整的に仕上げる。先端を欠損する。   |    |
| 152 A1区                                      | 台形様石器     | Rh       | 6.2  | 4.3 | 1.5 | 26.9                 | 裏面はボジ面に大きい大きな剥離面からなる。刃部に底面剥離がある。   |    |
| 153 A1区 SA500                                | 剥離        | Rh       | 5.0  | 4.2 | 2.2 | 42.4                 | 155と同一母石。剥離打面による剥片の末端に刃部を設定。全体に堅っている。  |    |
| 154 A1区 SC261#                               | 削器        | Rh       | 4.3  | 5.5 | 2.3 | 50.4                 | 無剥離打面により削離された長成長剥片素材。右側面に細かな剥離が認められる。下端は欠損する。                                  |    |
| 155 A1区 SA500                                | 剥片        | Rh       | 6.1  | 3.5 | 1.8 | 35.1                 | 153と同一母石。石材の材質によるものか、未確認は不定に削離されている。   |    |
| 156 A1区 レキ3                                  | 二次加工ある剥片  | S        | 7.5  | 5.4 | 2.1 | 74.7                 | 打面剥片はない。認長成長剥片素材で、左側面に平印的な剥離が施される。   |    |
| 157 A1区 SI35#                                | 石核        | Hl       | 7.1  | 4.7 | 2.9 | 74.7                 | 厚手の剥片素材の石核。  |    |
| 158 A1区                                      | 駆石刃       | Rh       |      |     |     |                      | 底部・尾端ともにない。  |    |
| 159 A1区                                      | 石核        | Hl       | 4.8  | 6.1 | 3.0 | 69.5                 | 両対面裏から以下の組織剥片を認識して剥離する。  |    |
| 160 A1区 ED                                   | 剥片        | S        | 9.8  | 4.9 | 2.4 | 112.7                | 剥離打面から剥離される。打面剥片はやや薄れる。構文時代の所産の可能性もある。   |    |
| 161 A1区 SP21#                                | 石核        | Hl       | 6.1  | 8.1 | 5.0 | 236.9                | 一打面より複数剥片を剥離したのち、旧剥離面を打面として剥片剥離する。   |    |
| 162 A1区 レキ1                                  | 尖頭器       | 麻Ob      | 2.5  | 1.4 | 0.8 | 2.0                  | 剥離面に近い不定形剥片素材。加工は全面面に及び、すべて裏面側より剥離される。   |    |
| 163 A1区 レキ1                                  | 尖頭器       | 麻Ob      | 2.2  | 1.3 | 0.5 | 1.2                  | 構文早中期の可塑性がある。  |    |
| 不定形成長剥片素材。加工は石全周面に及び、裏面には裏面が残る。構文早中期の可塑性がある。 |           |          |      |     |     |                      |  |    |

## 小 緒

旧石器時代Ⅱ期は、砾群3基と、頁岩Ⅰの石器製作・流紋岩・頁岩製ナイフ形石器・台形様石器・角錐状石器に特徴付けられる。石材利用は眼下の小丸川で容易に採集可能な石材を中心とし、旧石器時代Ⅰ期にはみられなかった、県北の五ヶ瀬川流域から持ち込まれたと思われる流紋岩類・南九州の日東産黒曜石のあることが特徴となる。

野首第1遺跡内で頻繁に剥片剥離が実施されたのは、頁岩Ⅰと一部のホルンフェルスⅡであり、それ以外の石材については単発の母岩資料も多く、遺跡外で準備された剥片類・石核が持ち込まれたものと考えられる。頁岩Ⅰの目的剥片は長さ4~5cmの縦長剥片であり、また他石材の剥片類も大小差はある程度縦長剥片指向である。瀬戸内技法関連などの横長剥片資料は、角錐状石器素材以外にみられず、剥片剥離において縦長剥片指向の強いことは、旧石器時代Ⅱ期石器群の大きな特徴となっている。

ナイフ形石器・台形様石器・角錐状石器は流紋岩製のものが多い。ナイフ形石器の素材獲得方法は、石核外縁より求心状に連続して剥離するものである。包含層外出土資料にも同石材製の台形様石器がみられ、その石器形状や流紋岩Ⅰ（県北系流紋岩で白色に風化する）との強い結びつきは特徴的である。

このナイフ形石器・台形様石器は、新富町音明寺第1、高鍋町北牛牧第5遺跡ほか、宮崎平野中央部で類例が増加している。これらは、本遺跡例と同じく、流紋岩Ⅰと同質の石材を好んで用いること、石核外縁より求心状に連続して剥離された剥片素材であること、基部を作出すること、素材剥片末端の形状を石器にそのまま活かすことなど、共通点が多い。

なお、本遺跡のこれらナイフ形石器・台形様石器は、遺跡内での素材獲得ではなく、製品の状態で搬入されたものである。

第13表 旧石器Ⅱ期の石材と人間行動の復元

| 石 材       | 接合 | 剥 片 剥 離                                     | 器 様 組 成                        | 行 動   |
|-----------|----|---|--------------------------------|---|
| 頁岩 1      | あり | 椎円器を大分割、それを再分割して、それぞれ剥片剥離・目的剥片は長さ4~5cmの縦長剥片 | 剥片類・石核<br>ナイフ形石器等の製品<br>はみられない | 遺跡外で標分崩があった可能性あり<br>目的剥片の剥離は遺跡内でおこなう<br>製品ないのは持ち出しか |
| 頁岩 2      | なし |   | 母岩を異にする剥片類                     | 遺跡外で剥離された剥片の持ち込み                                    |
| 流紋岩 1     | なし | 石核外縁より斜めに剥離軸をもつ<br>剥片を、求心状に連続して剥離する         | ナイフ形石器・<br>台形様石器               | 製品の持ち込み   |
| 流紋岩 2     | なし |   | 剥片類・石核                         | 剥片類・石核の持ち込み   |
| 流紋岩 3     | なし | 横長剥片剥離                                      | 角錐状石器                          | 製品の持ち込み   |
| ホルンフェルス 2 | あり |   | 剥片類・石核                         | 遺跡外で剥離された剥片の持ち込み<br>若干の遺跡内での剥片剥離                    |
| 日東産黒曜石    | なし |   | ナイフ形石器                         | 製品の持ち込み   |
| 桑ノ木津留産黒曜石 | なし |   | 尖頭器                            | 製品の持ち込み   |

## 第2節 繩文時代の遺構と遺物

繩文時代の遺構・遺物は主に第Ⅲ層から検出した。第Ⅲ層は第Ⅱ層が部分的にしか残存していないため、表土（第Ⅰ層）下に堆積していた。この第Ⅲ層はA1区では大部分にうすく、A2区では東側を中心に分布している状況であった。（詳しくは第V章 層序に記述している。）

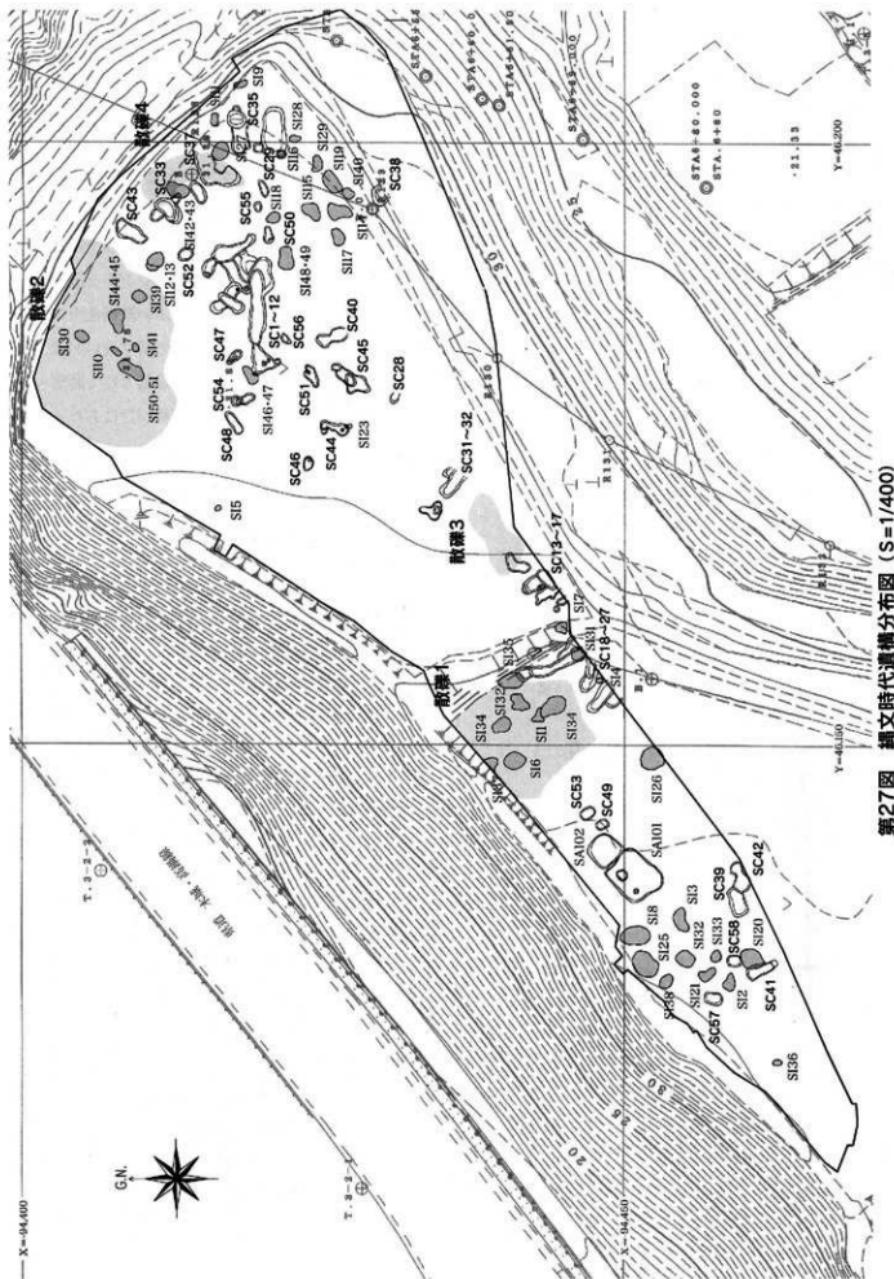
第Ⅲ層には繩文時代の遺構・遺物の他に古墳時代以降の掘り込み（遺構底面）も達しており、遺構検出をすると、挿入図版「遺構分布状況」のように繩文時代の遺構と古墳時代以降の遺構が同時に確認される状態であった。また、「遺構と遺構が重なる（切りあう）」「土色の判別が難しい」などにより、遺構検出にかなりの時間を費やすこととなった。

検出された繩文時代の主な遺構・遺物は以下のとおりである。出土状況等の詳細については以下の順にそれぞれ細節を設けて記述している。

|     |                                 |     |
|-----|---------------------------------|-----|
| 遺 構 | ● 散 磚                           | 4群  |
|     | ● 集石遺構                          | 51基 |
|     | ● 上 坑                           | 59基 |
|     | ● 縦穴住居                          | 2軒  |
| 遺 物 | ● 繩文時代早期・繩文時代前期・繩文時代後期と考えられる土器等 |     |
|     | ● 石鏃・石核・石斧・石錐・磨石等               |     |



遺構分布状況



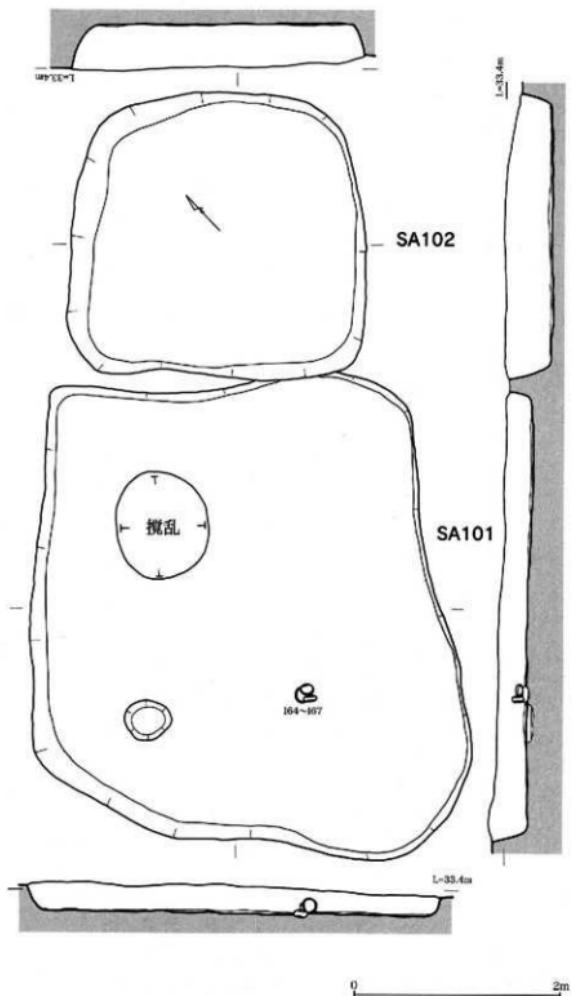
第27図 鋼文時代遺構分布図 ( $S=1/400$ )

## 1 穫穴住居

竪穴住居は、丘陵頂部にあたるA1区中央で検出された。検出当初は10m×5mほどの、隅丸方形をしたにぶい暗褐色の「にじみ」に過ぎず、遺構であるのかどうかでさえ明確でなかった。そこで、トレンチを設定したところ、にぶい暗褐色土の立ち上がりとその切り合いが確認されたため、遺構として認定した。遺構の性格づけにあたって、ほかの土坑などと比較して壁が90°近くに立ち上がること、平面積の広いことを理由に、住居の可能性があるとみた。

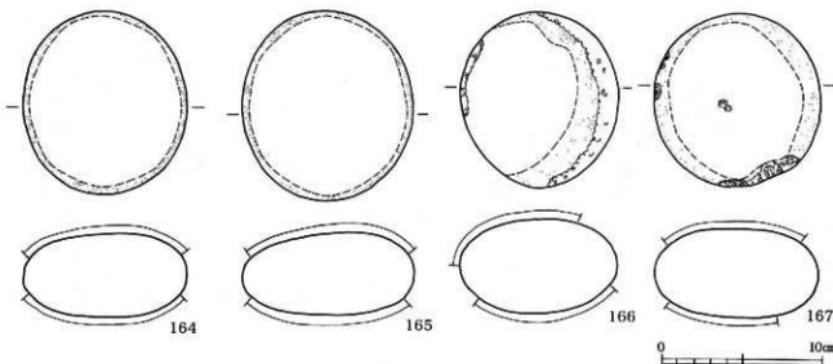
【SA101】 平面形はややいびつな隅丸方形である。床面にはピットの可能性のある浅い掘り込みが1ヶ所ある。住居内の西壁から1.2mには、磨石が4点まとめ置かれていた（4点のうち1点は、住居精査に先行したトレンチの中で採りあげており、第28図では3点のみの図化となつた）。

磨石（164～167）はすべて尾鈴山酸性岩製で、顕著な崩面を持つ。



第28図 SA101・102実測図

【SA102】 2.5m四方の隅丸方形プランである。縄文土器の細片が出土した。柱穴など、住居内の構造を示すものはない。SA102はSA101を切っている。



第29図 SA101出土遺物実測図

第14表 穫穴住居観察表

|       | 平面形     | 長径(m) | 短径(m) | 残深(m) | 床面積(m <sup>2</sup> ) | 遺物                     | 備考                 |
|-------|---------|-------|-------|-------|----------------------|------------------------|--------------------|
| SA101 | いびつな橢円形 | 3.94  | 3.48  | 0.14  | 約13.71               | 押印文土器(237)・磨石(164~167) | 床面に浅いピット状の落ち込みが1ヶ所 |
| SA102 | 橢円形     | 2.50  | 2.50  |       | 6.25                 | 押印文土器残片                | 柱穴などは未確認           |

第15表 SA101出土土器観察表

| 遺物<br>番号 | 種類 | 形状  | 法<br>面 | 手法・模様・文様ほか                 | 色<br>調 |                         | 地<br>土<br>の<br>特<br>徴            | 備<br>考 |
|----------|----|-----|--------|----------------------------|--------|-------------------------|----------------------------------|--------|
|          |    |     |        |                            | 外<br>面 | 内<br>面                  |                                  |        |
| 237      | 滑鉢 | 口縁部 | 口縁     | SA101: 山形押印文、山形押印文(口<br>縁) | 山形押印文  | 山形押印文<br>に深い実槽<br>に深い實槽 | 9mmの大褐色粒、3mm以下の淡黄色・<br>灰白色・黑色光沢粒 | 山形押印文  |

第16表 SA101出土石器観察表

| No. | 目記      | 種類 | 石材     | 長    | 幅    | 厚   | 重量    | 備考 |
|-----|---------|----|--------|------|------|-----|-------|----|
| 164 | SA1 2区建 | 磨石 | 尾崎山巣岩質 | 11.8 | 10.1 | 5.2 | 860.0 |    |
| 165 | #       | #  | #      | 11.8 | 10.6 | 5.1 | 927.0 |    |
| 166 | #       | #  | #      | 10.4 | 9.8  | 5.9 | 873.0 |    |
| 167 | #       | #  | #      | 10.7 | 10.3 | 5.5 | 830.0 |    |

## 2 散 碓

表土（耕作土）を重機で剥ぎ、遺構検出を行っていくと、A区において褐色土（第III層）から礫が多量に検出された。第III層は縄文時代早期以降の包含層であり、縄文時代の遺物を多量に含んでいた。この第III層には上層から掘り込まれた遺構（古墳時代以降）の底面が達しており、散疎・集石遺構とともにかなりの影響を受けていた。今回の調査では礫が1~2m以内ぐらいうる範囲に、周辺より密に集まっている状態を「集石遺構」と考え、広範囲に広がる「散疎」と区別することにした。この結果、集石遺構は全部で51基を検出し、散疎は4群を確認できた。散疎と集石遺構は層位的に縄文時代早期のものであると考えられる。集石遺構のうち14基は散疎の下から検出できたものであった。（散疎や集石遺構の分布状況については第27図を参照。）

【散疎】 A1区の東側付近から検出された。疎の分布は濃淡があり一様な密度でなく、非常に密集している部分と散漫な部分が確認できた。また、旧地形において最も高度が高いと考え



第30図 散礫1検出状況

られる部分を中心にして礫の分布が濃くなる傾向もあった。構成している礫は砂岩が中心で、円礫が割れた状態のものが多く、赤変している礫も多かった。散礫1の下ではSI1・22・24・35の4基が検出され、南西側付近では土坑群が検出された。遺物は縄文時代早期～前期に相当する土器を出土している。散礫1は東側が人工的にカットしており、A2区と段差があるので、その分布域はさらに東側に広がっていたのかもしれない。

#### 【散礫2】

A2区の北側から検出された。礫の分布は平面的には一様（散礫1よりも密）であるが、丘陵端部に行くほど、礫の層が厚くなっている（密度が高くなっている）いたのが確認できた。また、後の要因による擾乱を受けている部分があり、その部分には礫がほとんど確認できなかった。構成している礫は砂岩

が中心であり、円礫が割れた状態のものも多かった。赤変している礫の割合は散礫1よりも高かった。散礫2の下でSI10・30・37・41・44・45・50・51の8基、SC34・36の2基が検出された。遺物は散礫1と同じく縄文時代早期～前期に相当する土器を出土している。散礫2の分布域は第Ⅲ層（縄文早期以降の包含層）が残存している部分とほぼ一致する。このため、散礫2は丘陵頂部が想定される西側から道状遺構のためカットされていた東側にかけてさらに広がる可能性がある。

**【散礫3】** A2区の南西側から検出された。礫の分布は薄く比較的一様であった。南側は調査地境界であり、南東側は古墳の周溝により切られていた。構成している礫は砂岩が中心であり、約半数が赤変していた。散礫3の下でSC13が検出された。

**【散礫4】** A2区の東側から検出された。散礫2と分布の様子は同様である。散礫4の下ではSI42・43の2基、SC33・37の2基が検出された。散礫4は散礫2と同一の散礫であったとも想定できる。



第31図 散礫2検出状況

### 3 集石遺構

集石遺構は全てA区に分布していた。検出位置は「A1区中央付近」・「A1区東側（散礫1）付近」・「A2区北側（散礫2）付近」・「A2区東側付近」の4箇所に集中している傾向があった。

集石遺構をここでは4つのタイプに分け掲載した。遺構の形態的な違いから分類することにし、分類にあたっては「誰が分類しても同じ結果になること」を心がけた。従って、礫の集まり方の疎密、赤化礫の数（割合）、炭化物の有無や量などについては今回の分類の観点から外すこととした。

分類の観点としては、「掘り込みの有無」・「底石（配石）の有無」の2つで、以下のように4つのタイプに分けた。

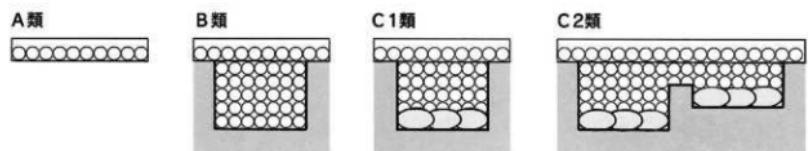
A類：掘り込み、底石（配石）をともにもたないもの。

B類：掘り込みはあるが、底石（配石）をもたないもの。

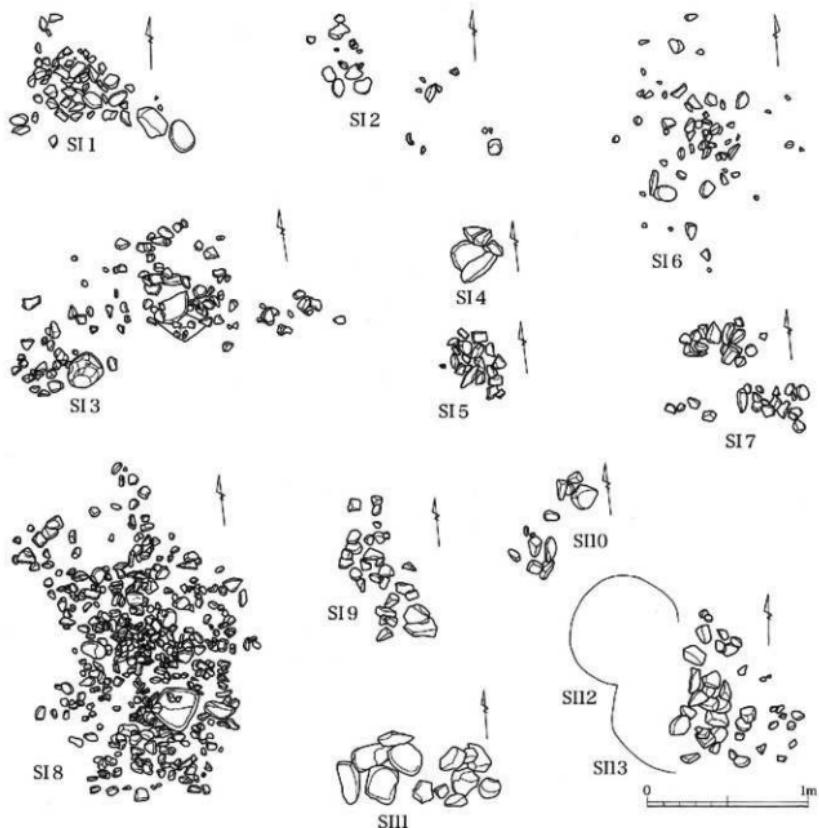
C類：掘り込み、底石（配石）をともにもつもの。

C1類：単独で検出したもの。

C2類：2基が切り合って（または非常に近接して）、検出したもの。



第32図 集石遺構分類模式図



第33図 集石遺構A類実測図

A類～C2類までの分類ごとの分布の傾向についてははっきりしたことはいえないが、調査地内のA区においてA・C1類は前述の4箇所に満遍なく分布していた。B類は「A2区東側付近」に6基が集中して分布していた。C2類はA2区北東側部分を中心に分布していた。

各集石遺構の規模や状況等について「第17表 集石遺構観察表」にまとめた。以下ではその分類ごとに3～5基を抽出して記述する。なお、分類ごとに図面の掲載の仕方を統一するよう努力したが、現地での実測図化の不手際（調査の進行状況や検出の仕方による）により、統一した状態で掲載でなきないものがあった。また、検出時にすでに上部礫をかなり失っているものもある。

#### A類：SI1～13

礫が周辺部よりも密に集まっており、明瞭な掘り込みをもたない。また、下部の底石（配石）も見られない。このタイプは炭化物を埋土中から確認できたものも少なく、赤化礫の数も比較的少なかった。従来からの「集石遺構は加火の場に関係する」という考え方方に立つと、加火が別の場所で行われたと考えられる。検出遺構の礫は使用前に集められたものか、または使用後に集まつたことが考えられるのではないかだろうか。

【SI2】 A1区西側中央部で検出した。周辺にSI20・21を検出している。径約5～10cmの円礫が集まり構成されていた。掘り込み・底石をともにもたなかつた。また、炭化物も検出していない。

【SI8】 A1区北側中央部で検出した。径約30cmの礫の周りに約20cmまでの礫（円礫）が集まって構成されている。西側に掘り込み（土坑？）あり、礫の一部はこれにかかっていた。掘り込み・底石をともにもたないが、赤変した礫も多く、炭化物も含まれていた。SI25が近接して検出された。

【SI13】 A2区北側の散礫2・散礫4の間から検出された。SI12と近接して検出された。東隣からは比較的大きめの礫を底面付近に含んだSC43を検出している。円礫が割れた礫（赤変したものが多い）が集まって構成されている。炭化物も検出している。

※ SI12は実測図化ができなかつたため、礫の範囲だけを模式的に示した。

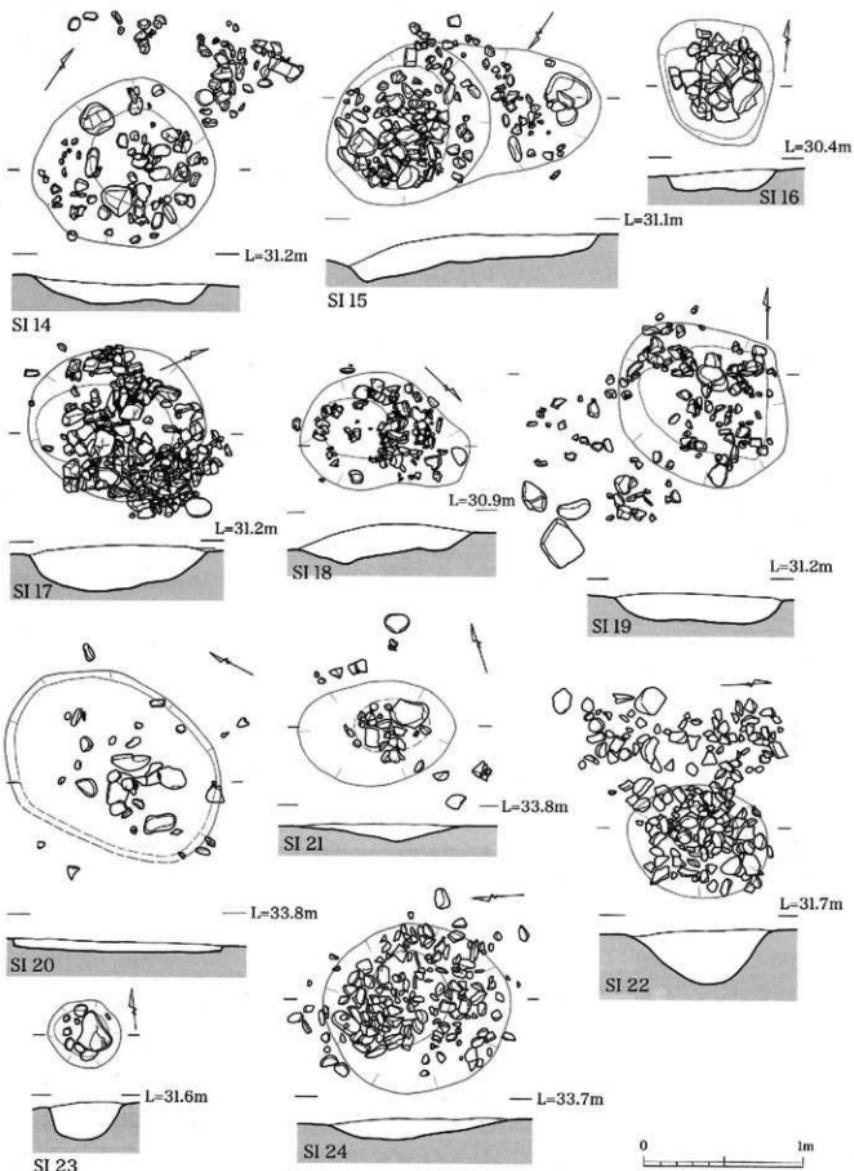
#### B類：SI14～24

礫が周辺部よりも密に集まっており、掘り込みを持つが下部の底石（配石）をもたないもの。明瞭で深い掘り込みをもつものと掘り込みが浅くあまりはつきりしていないものがある。この掘り込みの深さの違いは容易に判別でき、形態も異なっている。掘り込みの深さの違いは利用法の違いを示すかもしれない。（深さの違いによる分類はしていない。）

【SI14】 A2区東端部で検出した。この付近にB類の集石が多く検出された。特にSI15・17・19とは近接して検出された。赤化礫を多く含み、炭化物も含んでいることからこれらの礫は加火されたと考えられる。掘り込みはSI21よりも深く、明瞭である。

【SI21】 A1区西側中央部で検出した。付近に数基の集石遺構を検出している。径約25cmの礫の周辺に割れた礫が集まつた状態であった。赤化礫も多く含まれていることからこれらの礫は加火されたと考えられる。掘り込みは浅く（約10数cm程度）、あまり明瞭でない。また、掘り込み面の傾斜は中心に向かってなだらかに下がつている。

【SI23】 A2区中央部付近で検出した。径約25cmの巨礫の周間に8個の礫を配している。掘り込



第34図 集石構造B類実測図